

---

# 錦城十六士

和奈寛向

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

錦城十六士

### 【コード】

N7400H

### 【作者名】

和奈寛向

### 【あらすじ】

石見重蔵は戦場の直中で目覚めた。大坂と関東の武士共が、今まさに互いの命を槍の穂先にかけようとしている大戦の直中で。甘い痺れと宵螢の幻影、脳裏に残る鈴の音。重蔵は怒涛に飲まれるようにして、伊達兵と真田兵の衝突点で、不本意ながら伊達兵相手に奮戦する。戦いの最中、隻腕の男が現れる。男はなぜ重蔵がここにいるのか、宵螢の幻影が夢か現か、重蔵の求める答えの在り処を知っているかのように思わせぶりに振舞う。

## 宵蛩（一）

夢の奥底に放逐されていた意識を取り戻すと、重蔵は戦場の直中にいた。大坂と関東の武士共が、命を槍の穂先にぶら下げて功名を奪い合うその時は間もないというのに、重蔵は甘い痺れの余韻を褥に、意識はまだ朧であった。

四天王寺の暮れる金堂の甍にかかった宵蛩の明滅は、夢の幻影であつたか、現の情景であつたか。

地を灼く夏の太陽は、蛩の幾万倍の激しさで、重蔵を支配する甘い痺れを駆逐した。五感を支配下に取り戻すと、重蔵は尋常ならざる地が己の居場所と知つた。

轟音が蒼天の白雲を追い散らした。鋭い音波が風を裂いた。激しくぶつかり合つた幾つかの音波は、奇妙な鉛の抱擁体となつて、ぱらぱらと地に落ちた。

立ち昇る硝煙の薄い膜の向こうで明滅するのは、宵蛩であるはずがない。が、重蔵にはそれと見えた。甘い痺れの残党がまだ脳内に潜んでいるらしい。

鉄砲隊の一斉射撃の後、錦の林と見紛う軍旗を風打させた両陣営は、槍兵の幾万の足音に幾千の馬蹄の轟きを重ねて、急速に接近する。蹴立てる怒濤を、喊声が凌駕した。

無数の槍と槍の交錯点で、初夏の陽より激しく、宵蛩よりも儂い命の明滅が、荒波のごとく伝播してゆく。重蔵は今、そこにいる。

重蔵は跳ね起きた。痺れの呪縛から解放されれば、鍛え抜かれた四肢は豹のごとく疾い。跳ねるや否や、長刀を抜きはなつた。

重蔵は不運には違いないが、愛刀の存在は確かな幸運であつた。二尺八寸の友がある限り、いかな地獄からも脱する自信が重蔵にはあつた。

足は関東方が速いとみえて、重蔵を串刺しにせんと迫つたのは、伊達笹の旗指物を背にした足軽であつた。彼の穂先は幻を貫き、重

敵の一閃で、凱旋を喜ぶ妻子の姿を描いた脳裏を乗せた首だけが飛んだ。

重蔵は残忍な男ではないが、この期に及んで、足輕の家族を案じてやる余裕はない。彼の後ろに続く者は、彼の背丈が急に短くなっても、臆することなく殺到してくるのだ。

二人目の伊達兵が、重蔵の愛刀に屠られている間に、真田六文銭の旗指物を背負った兵が槍襖で伊達兵をなぎ倒した。

重蔵にとっては不本意ながら、真田兵は伊達兵と渡り合っている浪人を味方の傭兵と理解したらしい。大坂方には、金と功名に釣られた浪人が多い。

大坂方にも関東方にも与するつもりのも頭ない重蔵ではあったが、血風吹き荒れる中で双方に言い訳する暇があるはずもなく、行きがかり上、大坂方として奮戦する羽目に陥った。

凄絶な戦いであつた。首を無くした者にも、容赦なく槍が突き立った。敵兵の喉を貫いた槍が、持ち主の腕ごと宙に飛んだ。返り血を浴びた者が、その血の味を知る間もなく、次の敵に屠られた。常日頃は物陰にひっそりと開いている冥界への入り口が、大盤振る舞いの大口を開けていた。死に神が悲鳴を上げて飛び交っていた。

重蔵の身も危うい。両勢の衝突の最初からこの場に立ち続けているのは、重蔵の他には誰もいない。

伊達隊には水野隊も加わっており、数は二万を超える。既に大坂方の後藤隊、薄田隊を打ち破っており、血の狂気に駆り立てられ、恐ろしく強い。捌き損ねた槍の一突きが、重蔵の致命傷となる。彼は身を鎧で守ってはいないのだ。

重蔵は、無言の死体に足を取られた。よろめいたところを槍で突かれ、それは捌いたものの体勢を大きく崩した。

正面に立った伊達兵が冷笑を浮かべた。死者名簿を手にした死に神の姿が見えた。冷笑を浮かべた伊達兵は、左目と喉元に鋭い刃の一撃を受けて、卒倒した。重蔵が見た死に神は、どうやら別の誰かを捜していたらしい。

重敵は、背後から飛来した手裏剣に助けられた。

「安堵すな。俺の飛び道具は伊達の槍ほど多くはないぞ」

手裏剣を放った男は、飛燕のように躍り出て、瞬く間に二人の敵を突き伏せた。

男は隻腕であつた。隻腕ではあつたが、残された腕は無類の手練れとみえて、伊達兵を全く寄せ付けなかつた。

疾い。

刃渡り上腕程の短刀を逆手に持って、敵兵の鎧の隙間を的確に貫いてゆく。しかし、侍の動きではない。野卑であり、そうであるが故に合理的でもあつた。いずこかで忍びの修練を積んだものとみえた。

憎悪と殺意の衝突点に、隻腕の男の奮戦により生じた空間で、重敵は体勢を整えた。

愛刀は鞘に返している。伊達兵の血と脂に塗れて、すでに殺傷力を失っている。重敵は、落ちていた槍を無造作に拾い上げた。柄の上部を叩くと、穂先に引つ掛かつていた誰かの耳が、ぼとりと落ちた。

隻腕の男の背後に回ろうとした伊達兵を一突きに仕留めて、重敵はさっそく借りを返した。血まみれの顔を向けた隻腕の男が、にたりと笑つた。

重敵にとつて槍は専門外ではあつたが、一向に槍をしごき、己が身を目指す槍を叩き落とし、薙ぎ倒し、突き伏せた。ここでは誰もが行うその作業を、重敵は懸命に、黙々と、誰よりも疾く行つた。

なぜ、こんな羽目に陥つたのか。当然の疑問が脳裏の底に微かに浮かんでも、瞬く間に弾け消えた。襲い来る殺気を全て突き伏せるまで、思考の全てを叩く、払う、突くに集中せねばならぬ。ただ、甘い痺れの残党がどうしても脳内を離れず、それがどこか遠いところで、鈴の音を聞かせている。

「退こう」

主を亡くした馬を奪つたものか、いつの間にか隻腕の男は馬上に

あつた。槍を振るい続けたその時の長さは知れぬが、見上げた隻腕の男の顔が、黄昏の暗さにあつた。

真田兵は退き始めている。うかうかすれば、伊達兵の前に置き去りにされる。しかし、大坂方ではない重蔵が、どこに退くというのか。

「退く?どこへ退く?」

「お主には、雲居に届く豊臣の大牙城が見えぬか?」

「待て。拙者は大坂方の浪人ではない」

「殺めた数も知れぬ伊達兵に説明するかね。通りすがりの者だと愉快げに、隻腕の男は笑つた。

「早く乗れ。手綱を持たねばならぬ俺には、お主を担いでやる手が足りぬ」

なおも躊躇する重蔵に、隻腕の男は舌を打つた。

「お主、鈴の音が聞こえよう」

隻腕の男は意味深に笑つた。重蔵がなぜこの場にいるのかを知っている笑いであつた。

「宵螢が待つておる。その光を愛でてやる気はないか?」

隻腕の男は、馬首を退路へ向けた。重蔵がなおも躊躇するのであれば、彼は置き去りにするつもりだつた。そうでなくては、自身が危うい。

重蔵は馬の背に飛び乗つた。

鈴の音は、脳裏の底で鳴り続けている。四天王寺の暮れる金堂の甍にかかった明滅は、現か幻か。それを確かめねばならぬ。

「片腕ゆえ、俺の馬使いは荒いぞ」

隻腕の男は、馬の腹を強く蹴つた。伊達勢の先鋒である片倉隊が、退勢にある真田勢の背後を襲っている。吹きすさぶ血風を切り裂いて、馬は疾走した。

「お主、何者だ」

重蔵は隻腕の男の背中に問うた。

「見ての通りの忍び崩れよ」

重敵には問い詰める権利があるはず。唐突に戦場に放り込まれたその因縁を知る手掛かりが、もしもこの隻腕の男の五体のどこかにあるならば。

「忍びの世界は、片腕では辛かろう」

重敵の温度ある言葉は、彼自身意外であつた。彼に許された辛辣な言葉が、他にいくつもあるはずなのに。

重敵にとって、隻腕の男は、もはや他人ではない。背を預けて戦つた男なのである。刃を納めれば、重敵は、情の深い男であつた。その情が背中から伝わつたとみえて、隻腕の男は心地良さげに快笑した。

馬は既に疾走する孤影である。

## 宵蚩（二）

乱刃が音もなく宙を弧に裂いて、四天王寺の伽藍に落ちた。千年の読経が染み込んだ土に突き立った乱刃は、仏土を犯す不敬を働きながら、白々と冴えていた。

月立ったばかりの早苗の日暮れは、金堂の甍に、まだ名残の朱を滲ませている。

重蔵は、不本意ながらも抜いた刃を鞘に返し、鈴を打つように鯉口を締めた。

三方に蹲る人影は、小手を激しく打たれたと見えて、己の右手首を押さえ、砕かれた骨の痛みに呻いていた。彼等が不意を襲った人物に、咄嗟の斬撃を峰打ちでいなす技量が備わっていたことを、彼等は感謝せねばなるまい。

「無体すな。奪うものとなき素浪人ぞ」  
言い置いて去ろうとする重蔵の足を、背後からの気配が押し止どめた。

「さすがの腕前」  
平手を打つ調子に乗せて賞美の言葉を贈る男の顔を、重蔵は知らぬ。知らぬが、知らぬで済む相手でないことは了知できた。

「石見重蔵殿とお見受けする」  
男には友人が多いらしく、背に二十人ばかりの侍を伴っている。さらに十名ばかりが、重蔵の背後にいるらしい。既に囲まれているということだ。

「貴殿は？」  
重蔵は、締めたばかりの鯉口を、再び寛げねばならなかった。面倒なことだ、と心中に呟いた言葉は、重蔵の絶対の自信である。数十名を屠る手順が面倒なのであって、斬り伏せられる自分は、彼の想像の中にはない。

人なき野に行く重蔵の自信を知ってか知らずか。

「拙者は、豊臣家七手組筆頭速水甲斐守が郎党にて、溝口助左衛門と申す」

名乗を上げた溝口は、重敵の挙措を慎重に窺いつつ、配下の侍を静かに左右に展開させた。何があっても逃がさぬ所存と見える。

「石見重敵殿でござるな？」

違う、と言った場合の損得を、重敵は勘定してみた。惚けてみせたとところで、すんなりと困いが解かれるとは思えぬ。余計な問答といらぬ刃の交錯を生ずるだけであろう。それは、面倒なことであった。

「いかにもその重敵でござるが、生憎と、豊臣御家の大身の御家臣殿の御用を受ける身の覚えがござらぬ」

「しからは御機嫌良う、と何げなく立ち去りたい重敵であったが、溝口の鉄面皮は重敵の軽い企みを黙殺した。主への忠勤に励む質と窺えた。

「貴殿になくとも、こちらにはある」

「さもあろう、と重敵は得心した。そうでなくては、縁なき身に、わざわざ配下をけしかけまい。手首を砕かれた三人は、溝口が明かした訳ではないが、彼に指示されて、腕試しに重敵を襲ったものだろう。」

「豊臣家の置かれた現状をご存じであろう」

「生憎と、世間からはみ出た素浪人ゆえ」

「嘘ではない。主も持たず、家族も持たず、諸国を流浪して三年になる。聖徳太子の遺徳に導かれたものか、摂津四天王寺の伽藍を彷徨っていたところである。」

「いかな世捨て人であろうとも、扶桑六十余州に在って、無道の戦が行われていることを知らぬ道理があるうか」

「確かに無道の戦いではあろう。だが重敵、正道の戦いなど聞いたことがなかった。かの織田信長の天下布武も、かの上杉謙信の義戦も、いかな大義名分があれ、その旗印の下で死んでいった兵や苦しんだ民草には、無道そのものの戦であろう。」

「内府に天下を奪われ申したと、いかなる顔で太閤殿下は右大臣様に「ご報告なされるのやら」

重敵は皮肉を言ってみた。徳川が豊臣の天下を篡奪しようと画策するのも、豊臣が織田の天下を乗っ取ったのも、奪われしものは無道と誇り、奪いしものは正道と嘯くのだ。ただそれだけのことである。

「故右大臣様は、家康ごとき化狸と盟を結ばれたことこそお嘆きであらう」

溝口の面の皮は相当に厚いとみえて、重敵の皮肉は彼の脳髄には達しなかつたようである。

「有意義な問答でござったな」

重敵としては溝口にこれ以上の時間を割きたくはない。豊臣家ほどの風前ではないとしても、彼の命にも限りがあるのだ。あたら時間浪費する必要は重敵にも、溝口にもないはず。

溝口の横を通り過ぎようとする重敵の前に、溝口の乗馬鞭が差し出された。蒔絵の施された華美な鞭である。

「まだ話は終わっておらぬ」

「されば疾く申されよ」

「貴殿の腕を、豊臣の藩屏として雇いたい」

「お断り申す」

にべもない重敵の返答に、しかし溝口の鉄面皮は揺るがない。微かに、嗜虐色の陰が射したのみである。

「万石の身にもなれように」

「勝てば、でござらう」

獲れもせぬ皮算用をする趣味は、重敵にはない。先年の冬の戦いの後、詐欺丸出しの謀略で堀を埋められた城に籠って、いかな勝算があるのかと、重敵の目元が言っている。

「確かに、今は勝てぬであらう」

「今は？」

溝口の物言いに、重敵は激しい違和感を覚えた。

「今一度申す。貴殿の腕を大枚で購いたい」  
溝口はくどい。

「その大枚で、鉄砲玉を購われるがよろしかろう。この方の腕とて千や万の侍を討ち取れるわけではないゆえ」

乾いた笑い声で幕を引きたかつたが、案の定、溝口にその気はないらしい。

「何も貴殿に、先陣を駆けて徳川勢に斬り込んでもらいたいわけではない。秀頼様をお守りしてもらいたいのだ」

「何から？」

重蔵は思わず吹き出しかけた。秀頼は元服も済ませた身でありながら、母親と腰元、そして近習に囲まれて、大坂城の奥で潜んでいると聞く。掘なき城を十重二十重に取り囲まれようと、差し当たり秀頼の身に襲い掛かるのは大筒の弾のみである。この石見重蔵に、大筒の弾除けになれと言うのであれば、笑止千万と苦笑するしかない。

「逐一説明してもよいが、生憎と時間がない。色々と腑に落ちぬこともあろうが、我が主が是非ともと貴殿を所望しておることは確かよ」

溝口が左右に合図すると、重蔵を包囲する三十人ばかりの輪が縮まった。

(やれやれ、結局面倒なことになった)

重蔵は二尺八寸の愛刀をすらりと抜いた。確かに面倒なことではあるが、危険極まる状況は、嫌いではない。

「我が配下を、けしかけた浪人輩と同じに考えてはなるまいぞ。主人の命は貴殿を連れてくることであって、五体満足とは聞いておらぬ」

溝口の鉄面皮に射していた嗜虐色が、黒い翼を広げた。重蔵は溝口の酷薄な笑みを小鼻辺りで受けて、一息にあしらった。

「貴殿等も誰一人五体満足で帰れぬぞ。そのお覚悟はありかな」  
重蔵は凄んだ。これまで幾人もそうしてきた者が持つ迫力があっ

た。溝口の配下の幾人かが、明らかに生唾を飲んだ。

重蔵の足元から旋風が立った。彼の練り上げられた剣気が、風を呼んだものとみえる。

重蔵を取り囲む三十の刀身で、仏塔に貫かれた落日の朱が照り返った。

ふと、時が止まる静寂を感じた。三十の刀身は、微動だにしない。どこかで鈴の音がする。凜々とする音色は遠いかと思えば近く、離れるかと思えばまた寄せる。

重蔵は甘い痺れを覚えた。溝口の配下に、妖しの術を使う輩がいるのだろうか。いや、彼等は皆、影絵のように静かである。その濃い影は次第に薄れ、刀身に照り返った落陽だけが、蛍の灯火のように残った。

静であった蛍の灯火はやがて動となり、黒い影となった四天王寺の甍に明滅し、いつしか、蛍が重蔵の周囲を回っているのか、彼自身回っているのかも判然としなくなった。

甘い痺れが心地良い。鈴の音は、いつか妖艶な声となって、耳元で囁く。

(抗うてはならぬ。痺れに身を任せよ。)

明滅していた蛍の灯火のうち、一際に美しく、艶かしい光があった。それは紅く、豊かで、濡れた女の唇であった。そうと知れたとき、重蔵は、己の存在が世界から引き剥がされるような感触を覚え、闇に落ちた。

### 宵蜚(三)

月が白い。

佳き酒でもあれば、月見酒といきたいところだが、こつも風が血生臭いのでは興も削がれる。

それでも随分と静かにはなつた。日暮れまでの阿鼻叫喚の激戦を空とぼけるつもりか、月明かりの下で上町台地は無言であつた。

大陸の詩人はかつて、国都が戦乱で荒廃しても、山や河の自然は残ると詠んだ。豊臣の大牙城が荒廃しても、同じように自然は残るのだらう。だが、この大坂城で、傷ついた身体を横たえる将兵達には、一体何が残るのだらうか。

八尾、若江、道明寺、誉田の各方面で敗退し、名だたる武将が血煙と散つた今、落城は明日であつてもおかしくない。明日を命の限りとする者のあるう将兵のために、今宵の夜が少しでも長ければ、重蔵は祈つた。

故太閤存命の砌、錦城と誉め称えられた大坂城も、今は無残である。堀は埋め立てられ、塀や櫓は毀された。美しい振袖を剥がれ、手込めにされかけた町娘の弱々しさである。

かつての総構えの向こうを見やると、天の川の流れがいつ変わったのかと訝しむほどに煌々としている。その光の群は、幾千ともしれぬ寄せ手の篝火である。そこには希望があつた。寄せ手にとつて、九分九厘の勝ち戦である。一番槍を駆ければ、帰りを待つ妻子の顔は明るいだらう。

希望と絶望が、一つの夜の下で同居している不思議さを、重蔵は思つた。

「見事に困んだものよ」

重蔵の感傷を破る声がした。

「四面から楚の歌が聞こえぬのが、ちと物足りぬがな」

重蔵は、詩情を邪魔する無粋物を振り返つた。そこには、闇夜に

半ば溶け込むようにして、隻腕の男がいた。

「それで」

重蔵の口吻が心持ち拗ねている。隻腕の男は重蔵を城に連れ込んでおきながら、二時以上も姿を晦ましていた。闇から吐き出されたかと思えば、娘を一人連れていく。歳頃は十五といったところか。「遅くなったのは済まぬ。城内の様子を探っておつた。裸城とは申せ、さすが太閤のご自慢とあつて、なかなか郭は広い」

隻腕の男は、残された腕を顔の前に挙げて、軽く謝罪した。

「それで」

軽く頷いて謝罪を受け入れると、重蔵は繰り返した。隻腕の男は、そのことよと言いつつ、重蔵の耳に囁いた。

「城は明日落ちるが、おぬしはどうする？」

隻腕の男は、見てきたように城が明日落ちると断言した。

「まだ真田殿や七手組のお歴々もおられように、詮なき申し様よな。それはよいが、どうするとは如何なる詮議じゃ？」

「大袈裟に申すでない。おぬしの身の振り様を聞いておるだけよ。城が落ちれば、おぬしの言い分はどうあれ、落人狩りの鋤鋤に追われる立場となるぞ」

「その立場に追い込んでくれた片割れとしては、些か冷たい申し様ではないか」

重蔵には、皮肉屋の質があるらしい。

「片割れとは心外至極」

隻腕の男は目を丸くしたが、本気が演技かは窺えない。忍び崩れと自ら評するだけあつて、表裏の読めぬ男である。

「貴殿は」

「貴殿ではない。重蔵じゆうざうじゃ」

「では、その重蔵。おぬしの申し様では、拙者の身の振り方次第では、落人狩りの憂き目を避け得る道があるように聞こえたが」

「そう聞こえたのであれば重畳」

「その道に至る道筋を聞こう」

重蔵は皮肉屋の上に、意地も悪い。隼蔵に語らせるだけ語らせておいて、その道筋を鼻息であしらおうという腹づもりでいる。落人狩りの百姓勢が何百であろうと、無意味な屍を晒すだけと嘯く自信が、重蔵にはある。

「その道筋は、宵螢の下へも導く道ぞ」

隼蔵の声に、誘惑がある。忍びの話術に籠絡されまいとしても、その言葉に甘い痺れの甘美を思い起こされた以上、重蔵は腹づもりを改める必要があつた。鼻の奥に溜めていた鼻息を解散させて、

「その道こそを探しておる」

重蔵は意識外の所作で、愛刀の鍔を左の親指で撫でた。隼蔵を斬ろうというのではない。四天王寺の薄暮の境内で明滅した宵螢の灯りと妖艶に濡れた紅い唇。耳腔の奥底に潜む鈴の音を聞くと、妖しの者を思い浮かべざるを得ない。体内に巣くつた魔を斬るために、重蔵は宵螢の住処を求めねばならず、そのためにこそ、隼蔵の御す馬に飛び乗つた重蔵である。

「その道を通るには覚悟がいるが、よいか」

確認する隼蔵は神妙である。寺門を潜る者が仰ぎ見る仁王像のようにも見える。

「よかるう」

何も知らぬ重蔵は、その道を通る覚悟は、真剣と真剣とで命を奪い合う時の覚悟以上ではあるまいと思つた。それ以上の覚悟を、重蔵は知らない。

「戻れぬ道ぞ」

隼蔵は念を押しした。

「結構なことだ」

隼蔵に合わせて神妙な顔をしているが、重蔵、心中では苦笑している。大袈裟であろう。戻れぬ道と謂われても、溪谷に渡された一本橋を行くわけでない。空は無限で、陸も四方に伸びている。過ぎ去った栄光に縋る豊臣家だけが裸城に逼塞しているのであって、素浪人の重蔵は自由気儘。戻れぬ道などどこにあるう。

「ときにその娘は誰だ？おぬしの連れ子とも思えぬが」

背を返して先導しようとした隼蔵のその背に、重蔵は問いかけた。隼蔵は傍らを振り返り、そこでにこやかに微笑んでいる娘を見ると、軽く驚いた。

「神楽殿、こちらにおられたか」

隼蔵は娘の存在を忘れていたのではなく、気付いていなかったらしい。

「石見様を一目見とうございました」

あどけなく娘は返した。やや慌てて、隼蔵は重蔵に神楽を紹介した。

「神楽殿は不思議な方だな。気配をまるで感じぬ。忍びが気付かぬのでは、面目丸つぶれじゃ」

隼蔵はからりと笑った。重蔵からも凄腕と見える隼蔵は、齡いくばくもない娘に、最初から白旗を掲げているようだ。それを笑うことはできぬ。重蔵とて、この娘に背後を取られて、それと気付く自信がない。人であれば誰もが発する生命としての気配を、娘は全く纏っていない。そこに奇異を覚えるのは、自身が人としての俗欲にまみれているからであろうかと、重蔵は思った。邪念を持たぬ無垢なる人物は、余計な雑音を周囲に振り撒かぬものかも知れない。

「神楽殿と申されるのか」

重蔵が尋ねても、娘は微笑んでいるだけである。

「本名は俺も知らぬし、本人も知らぬ。ただ神楽舞を上手くするゆえ、神楽殿と呼んでおる」

隼蔵が娘に代わって答えた。

「そのままではないか。創意工夫が感じられぬのう」  
諧謔半ばに重蔵は指摘した。

「ではおぬしの創意工夫を聞こう」

宿題を返されて、重蔵は、じつと娘を見た。朗らかに笑っている。少し、知恵が遅れているようにも見える。

「まあ、神楽殿でよからう」

さりげなく、重蔵は宿題を逃れた。神楽は、あい、と返事をしてまた笑った。

重蔵は当初、この娘こそ宵蛩の正体ではないかと推察したが、その推察をすぐに棄てた。四天王寺の薄暮に浮かんだ紅い唇はもつと妖艶に成熟した女のものであった。神楽の唇も紅く美しいが、そこに妖しさはない。

隼蔵が言うのとは違う意味で、重蔵は神楽に不思議を感じる。心がほぐれる不思議だ。心の細波を凪ぐ不思議である。重蔵はただ一会の邂逅で、神楽を気に入った。生涯の友となる予感を覚える人物を二人も同時に得た今日という日は、徳川と豊臣の争いの直中に放り込まれた事実と表裏となつて、重蔵にとって吉日なのか凶日なのか。その問答を心中に巡らせることに微かな興味を覚えた重蔵であったが、突如沸き上がった鳴動が重蔵の長閑な思考を粉碎した。

城が揺れた。

地中深くある大地の血脈が怒りに熱く滾るとき、大地は隆起し、灼熱の血飛沫を噴き上げる。それが火山の噴火という現象の理と理解する重蔵は、今まさにその大地の営みが行われようとしているのかと畏怖した。が、ここに火山はなく、夜天に迫るのは大坂城の天守のみである。その天守の辺りから、おぞましい喊声四方の大気を揺るがした。

鶴も怯える声であろう。この世のものであるうはずがない。臨終を迎えた城が哭いているとも聞こえる。

おぞましき喊声は夜天高くに消え去つたが、余韻がまだ夜気を振るわしている。城の揺れは収まったが、背筋を通つた冷たさは残つた。

「豊臣は進退窮まつた挙げ句に、魔界から鬼でも雇うたか」

諧謔を口にした重蔵だが、その語を言い終わらぬ内に、あながち的はずれでないかも知れぬと身震いした。

「鬼などおらぬが、鬼のようなものはおる」

隼蔵は、城の鳴動もおぞましき喊声も経験済であるらしく、神楽

共々、平然としている。

「その鬼のようなものに、これからおぬしは会わねばならぬ」  
身を翻して、隼蔵は闇に消え入った。その背を追うべきか、重蔵は刹那躊躇した。隼蔵はこの世ならぬ世界の案内人であるのやも知れぬ。

(それも良からう)

重蔵は隼蔵の後を追った。丁度、あの世で会いたい者もいる。

## 宵蛩（四）

松明を焚いてなお暗い闇の底の、さらに底を降りて行く。外界は風光り若草萌える穏やかさだが、ここは四季の移り変わりとは無縁に、肌寒く、命の息吹が感じられぬ世界である。

松明の灯かりで辛うじて浮かぶ岩肌の坑道を降り行くのは、僧形の男である。彼は、彼の十年にも及ぶ戦いの日々を、一つずつ絵巻に描くようにして脳裏に去来させた。

幾千、幾万の信者が、あるいは首を打たれ、あるいは業火に焼かれて死んでいったことだろう。信者に死を命じたのは彼である。進まば極楽、退かば地獄と鼓舞督戦し、教導したのも彼である。その事實に後悔はなく、懺悔もない。彼はこの世に極楽浄土を現出させることができるかと信じたのであり、信者はその彼を信じたのである。願わくば、苦しみ悶えて息絶えた信者達が御仏の裾に縋つて、御仏の叡知垂れ滴る極楽に辿り着かんことを祈るのみである。

彼自身も、いずれ御仏の下へと導かれようが、数万の死を命じた彼の罪業は一信者と比べようもなく、一度は六界の底の底まで落ちねばなるまい。その底へ通じる道はまだ見ぬが、今降り行くこの闇の坑道より明るいということはあるまい。

古くは貴人の墳であつたらしい。こだまする足音と共に地の底に落ちて行く灯火が闇を薄く払うたび、剥き出しの岩肌に顔料の名残が、今となつては解読不可能な物語を語りかけてくる。

通常、墳には貴人の棺が収められるが、この墳を造成した古人は、こここの最奥に別の物を納めた。それは秘匿というよりも、抹消といふべき隠し様であつた。

隠蔽の強固な扉が開かれたのは、天文元年のことである。後世に天文学華の乱と伝わる法華衆の一揆に襲われ、本願寺第十世の証如は毀壞された山科本願寺を退去して、石山に本拠を遷した。

石山本願寺は摂津上町台地に盤踞する城塞と言つてよい構えで、

一時には山科本願寺をも圧倒する勢力を誇る規模であつたため、証如が本山とするに何等の不足はなかつた。

石山衆の中には、山科が法華衆に焼き払われたと聞いて、表向きは宗敵の狼藉に激怒しつつも、内心にほくそ笑んでいた者もいるかも知れない。永正元年、石山の勢力を危惧した第九世の実如により、石山門徒は厳しい弾圧を受けたからである。

ともあれ、山科本願寺五十年の歴史を無理やり閉ざされた証如は、石山にて新たな本願寺の歴史を拓くことにした。

法華衆の蛮行は、その後法華衆が比叡山延暦寺と対立することとなつて沈静し、本願寺はその機に乗じて和睦を結んだ。

証如は、社坊一つ残らず灰燼とされた経験を反省し、石山本願寺をさらに強固に要塞化した。その普請の過程で、上町台地の地下深くに、封印の施された石門を発見したのである。

そもそも石山という地名には、太古の磐座いわくら信仰が関与しているとも言う。神々との距離がまだそう遠くなかつた時代、人々は巨大な磐の存在そのものに畏怖し、自然崇拜していたのだらう。

太古人が神の叡知をみた巨磐は、その奥への道を閉ざす石門であった。証如が偶然開いたその石門を、その子、本願寺第十一世顕如が閉じるべく、今、奈落のごとき道を下っているのである。

顕如は足を止めた。松明の炎程度では払う闇の範囲も僅かで、その向こうの闇に有る存在を照らすことはできない。しかし感じることはできる。暗闇に埋もれながら、そこにあるものは圧倒的な質量を持っていた。

石門である。

顕如は松明を前方へかざした。石門の前に、三つの影が浮かび上がった。両脇の影は与り知らぬが、真ん中の影は、顕如にとってはそこにあることが当然であると思われた。むしろ、現れるのが遅いほどだった。

「門を閉ざすのですか、光佐」

艶やかに円熟した女の声である。名を呼ばれただけで、身も蕩け

そんな誘惑がある。仏への道をしっかりと踏み締めている顕如でなければ、とてもその声に抗えまい。

「問うには及ぶまい。誰よりもそなたが、それを悟つていよう」

顕如は魔を退けるように言った。

「信長と和議を結ぶとか。俱に天を戴かざる仏敵ではなかったのですか」

妖艶に、挑発的に女は言う。

「極楽浄土へ至る道は何も一筋ではない。そなたの力を得て十年戦つて参つたが、それは正しき道ではなかったと、己の不明を叱つておつたところ」

女は悩ましく笑つた。

「そなたの不明は、妾と身を一つとせなんだこと。そなたの陽と妾の陰がまぐわつておれば、信長など一掃できたでありますよ。光佐よ、石門を閉じるのは、まだ早いのではないですか」

今からでもこの身の蜜を味わつてみよと女は言う。松明の灯りと暗闇との境の幽明で、女は衣を寛げた。白い肢体と豊かな胸が零れ出た。男であれば誰しもが、その蜜の甘さを思わざるを得まい。

「そなたのなりを見れば、我が父証如の賢明さが分かる。父は偶然石門を開いてしまったが、そなたを近づけることはなかった。我は浅はかにもそなたの力に目を眩ましてしもつたが、溺れることはせぬ」

顕如は女の企みを笑殺した。光佐と諱いみなを呼ぶことも片腹痛い。諱いみなを言霊に乗せようと、我を支配することはできぬと。

「十万の信徒があので泣いておりましよう」

「彼らは往生したのである。御仏の下へと逝つたのだ。そなたごときが、我が信徒の本望を理解できようはずはない」

顕如は女を蔑んだ。その視線を受けて、妖艶に微笑んでいた女の容貌が一変した。悍ましい鬼女の面と化けた。

「ならば信徒の声を聞かせてやろう。ちょうど良い具合に、辺を徘徊していた靈魂を捕まえておつたゆえ」

女は常人の目では見えぬ手綱を解いた。女の両脇に居た影の目が赤く灯った。石山合戦で死んだ門徒であるらしい。仏の裾を求めて彷徨っていたところ、女の魔手に捕まったものとみえる。

怒りとも哀しみともつかぬ喚き声を発して、かつて門徒であった影が顕如に襲いかかった。顕如、慌てず右腕を突き出す。数珠が握られてあった。

顕如が気合を掛けると、襲いかかった影は霧と消えた。門徒であった影は、無となったのである。

「容赦ないのう。おぬしの命により信長の兵と戦い、槍に貫かれる以前は善良な門徒であつたらうに」

「成仏できぬ魂であれば説法して弥陀の下へ導くが慈。魔に捕らわれた魂であれば、一度無として、輪廻の端緒に赴かせるが慈」

言い放つや、顕如は数珠を提げ持った右手を前方に置いたまま、女との間合いを、ずっと詰めた。女は唸つたが、顕如の圧力に抗うことはできず石門の岩肌に押し付けられた。赤く濡れた唇が苦痛に歪み、剥き出された牙を恨めしげに軋ませた。

「退け。法に外れた者よ」

顕如が右手を大きく払うと、女は突風に煽られたように、右手の岩壁に叩きつけられた。

「そなたの力はそなた自身のものではない。その力の源を我が背に負うておる以上、そなたが我に抗えよう道理はない。無駄な齒軋りは止めるがよい。所詮、そなたは生身の身体を媒体にせねば現世の草一本動かせぬ輩。神楽舞う巫女に過ぎぬ」

諭すように、顕如は言う。仏法を説かれた鬼の苦しみ同様に、女は身を擦らせた。

顕如は視線を正面に戻した。そこに圧倒的な質量で存在する石門は、かつて崇拜の対象とされた往時、蒼き空の下でどれほどの神々しさであったことが。その神々しき磐座を重い暗闇の下に秘匿せざるを得なかつた太古人の苦悩に、顕如は思い至ることができたし、また正しい行為であつたことも理解している。

この力は、光の下に出してはなるまい。顕如が数珠を提げた右手で石門に触れ、経を唱えると、微かに鳴動がした。その鳴動が尽きると、顕如一人分程度に石門が開いており、祠が現れた。

祠には仄かに光る木箱が安置されており、蓋が開けられていて、その中に迎え入れるべきものの帰りを待っていた。顕如は背負っていた袋を取り外し、中から光を一つ取りだした。

厚く織られた袋に包まれているときには静まっていたが、その包みを脱すると、それは騒がしい程に輝いた。星を手にしたようである。顕如は光を木箱にしまうと、蓋を閉じた。再び経を唱え、石門を閉ざす。

顕如は深い息を吐いた。その吐息の届く先で、女は無言であった。顕如は女に歩み寄った。女の鬼面は失われていた。妖しい艶やかさもなかった。唇は赤いままだが無機質で、女には生きている気配がなかった。丁度、打ち棄てられた人形と同じである。

「哀れな」

顕如は女のために合掌した。何の因果が、この哀れな女を産み落としたのか。

顕如は法衣を脱いで、抜け殻の女に掛けてやった。顕如があの光の珠を破壊せぬ以上、いずれ誰かが石門を開き、再び女に妖気が吹き込まれよう。それが何時かは知れぬが、それまでは安らかな夢を見るがよい。顕如は合掌しながら、そう女に語りかけた。

裾を払って立ち上がった顕如は、暗い闇の坑道を戻って行く。出口の小さな光を見つけたとき、顕如はようやく安堵の息を吐いた。死者の国から、生者の国へ戻ってきた心地である。

光を抜けると、一棟の堂であった。堂を出ると、喧騒が出迎えた。石山本願寺は退去の準備の最中で、掛け声を挙げるか、走り回るかをしない者はいなかった。

永い戦いであった。信長と戦いながら、法外ほつげの力を持つ誘惑とも戦った。前者とも後者とも引き分けた。いや、どちらも負けに等しいかと、顕如は自嘲した。

「憑き物を落として参つたな」

陽を背にした男が、地力の強い声で出迎えた。古い馴染みである。齢は四十に届くまい。筋骨隆々とした偉丈夫である。三尺の太刀を肩に担いでいる。

「であるのに浮かぬ顔よな。腑抜けておる場合ではないぞ。ここでの合戦は終わったが、明日からもまた戦いぞ」

男は強く顕如の肩を叩いた。その痛みに顕如は顔をしかめたが、身体に纏わり付いていた重く湿った糸が断たれたような爽快も感じた。

「鉄雲斎よ」

顕如は男の名を呼んだ。

「あの法外の力を滅して良いものかどうか、今の我では判断が付かぬ。この鈍さが後年の痛恨となるかも知れぬ。その時には、お主の剣の腕を借りることになるかも知れぬ」

顕如がそう言うと、鉄雲斎は豪快に笑った。

「いつでも貸してやる。どれ、今からでもその堂の隠し戸にある坑道を一走り走って、そなたの悩みの種を両断してきて進ぜよう」

鉄雲斎は本当に走り出しそうだった。苦笑しつつ、顕如はその猪突を制した。

鉄雲斎に話したとおり、今はまだ判断が付かない。法外の力と云えど、この世に存する限り、御仏の叡智の内にある。理に非ずと見えども、それもまた理である。

（信長ならばあるいは）

永年の宿敵に、顕如は仄かな期待を寄せた。神仏を恐れぬ信長であれば、石門の中の祠を破壊して一顧だにすまい。何物にも囚われず、合理的に、己の信じる道を驀進する信長が、少し羨ましくもある。

本願寺門徒が一人として知らぬ顕如の密かな期待を寄せられた信長は、しかし、これより二年後に斃れるのである。

## 宵蛩（五）

毛利勝永は忠義の人である。また、兵を率いて、攻守に鮮やかな人である。

尾張に生まれ、若くして、父共ども秀吉に仕えた。古参であった父は、黄母衣七騎衆の一人に数えられ、勝永自身も、豊臣家次代の功臣たれと、秀吉に期待されていたはずである。

関ヶ原の前哨戦では伏見城攻略で活躍したが、本戦では、毛利秀元の与力として配されていたため、南宮山で齒軋りする他なかった。家康と裏交渉していた吉川広家隊に進路を塞がれていたため、毛利秀元は動けず、その与力である勝永も槍を空しくしたまま、西軍の旗が倒れてゆくのを傍観していただけである。

独立した部隊を構えることのできる大封を持たぬことが勝永には悔しかったであろう。総じて、豊臣家の真の忠臣は禄高が低い。石田三成しかり、大谷吉継しかり。

秀吉は柴田勝家を賤ヶ岳で破つて以来、十年もかけずに天下を統一した。信長の築いた地盤があつたとはいえ、あまりに早い統一事業は、各地に大封を持つ大名を残すこととなつた。

必然的に、豊臣恩顧、特に次代を担うべき若い人材は、武勲を重ねる機会もなく、小封に甘んじざるを得なかつた。秀吉が期待したであろう福島政則、加藤清正、黒田長政、小早川秀秋は、こぞつて家康に跪いた。彼らには彼らの言い分があつただろうが、明らかに豊臣家の乾坤一擲となる戦いにおいて、彼らの槍が西を向いたのは弁解無用の事実である。

速やかな統一が速やかな崩壊に繋がつたのであれば、その現象は皮肉と云えばよいのか、因果応報と云えばよいのか。

ともかく、毛利勝永は西軍に与したかどで改易となつた。勝永は父や弟と共に、旧知である山内一豊に預けられた。

豊臣政権下の掛川五万石から一躍土佐二十万石の国主に昇った一豊は、主恩は忘れるが私恩は忘れぬ質であつたらしく、勝永等を厚く遇した。

西軍に属したことが罪であつたとするならば、その罪人に千石を与えて厚遇した行為は美談であるのだろうか。一豊自身はそうであると思つたかも知れない。勝永はどうか。

一豊一人が家康に勝ちをもたらしたわけではなからうが、秀吉に恩義ある者共がその恩に報いる行動を取っておれば、勝永の運命は大きく変わっていたに違いない。平伏した下座から、遙か上座に仰ぎ見る一豊の顔は、勝永の顔であつたかも知れない。

しかし、勝永は突き落とされた。背を突いた腕の一本は一豊の腕である。崖から突き落とされた者が、突き落とした者から細い綱を垂らされたとして、その細い綱を感謝と共に掴むだらうか。

とは云つても、一豊の厚情によつて妻子が路頭に迷わなくて済んだことは、勝永としても素直に感謝してよいだらう。妻子の安全は、父の矜持に勝るとも劣らぬ価値を持つはずである。

勝者と敗者とを厳然と別つ落差を挟んで、一豊の顔を見る勝永の心境は複雑だつたに違いない。

穿わず、邪推せず、戦国の習いに従い家と郎党を守るため涙を飲んで旧主から離れた男が、忠義を貫いた旧知の士を惜しんで厚意で迎え、その意気に感じた士が深い感謝を返したとみた方が、歴史絵巻は美しく見える。

しかし、その後、豊臣家から誘いを受けるや直ぐさま土佐を脱出して、大坂城に馳せ参じているところをみると、やはり勝永は、一豊に厚遇されながらも、腹に一物を抱き続けていたということだらう。

秀吉に兵略の才を認められながらも、その才を遺憾なく發揮する場に恵まれなかった勝永は、大坂の役でようやく大翼を羽ばたかせることになる。

その勝永に命ぜられて、巻風の隼蔵は、大坂城本丸御殿の一室で

控えている。その横で胡座かく石見重蔵は憮然。彼は縛られることが嫌いな男だ。命ぜられることは、より以上に嫌いである。彼は、神の命が下ろうとも、平然に嫌と言える男である。

一方、もう半刻ほどにもなろうというのに、隼蔵は身じろぎもせず控えている。風貌は粗野だが、礼儀は弁えているようだ。忍びは人に仕えることによつて存在意義が生まれるといえる。隼蔵も、かつてはいずこかの侍に仕えていたものとみえる。いや、今も誰かに仕えてここにいると考えた方が自然だろうと、重蔵は思った。自分のような野良犬じゃない。重蔵は、薄く嗤った。

その嗤いを向けた先の襖が騒がしく開いた。開けた人物の機嫌が良からうはずはない。重蔵の予想どおり、奥の部屋から姿を出した人物は、怒色を露としている。風貌は冴えないが、眼光は精悍である。その人物は大股に畳を踏み付けて、重蔵の前を横切った。救い難しかな豊臣家。その人物の足音がそう叫んでいるように、重蔵には聞こえた。彼こそ真田信繁その人であると、重蔵は後で隼蔵から教えられた。

真田信繁に続いて、明石全登や七手組の歴々が足早に歩み去った。隼蔵は頭を下げたが、重蔵は遠慮のない視線を彼らに向けた。

大坂の役に途中参加した重蔵には感慨を持ち様がないが、随分と寂しくなったものである。ほんの一年前、大坂城には長宗我部盛親、後藤基次、薄田兼相、木村重成など、煌びやかな将星が集結していた。彼らは次々に倒れ、今の大坂城には底の見た宝石箱の寂しさがある。

最後に現れたのは毛利勝永である。彼は控えている隼蔵らを見ると、柔らかく笑った。真田信繁を先頭にして過ぎ去った者達とは対極の、余裕が彼にはある。

「真田殿の主張も分からぬではないが」

勝永は言った。

この日、すなわち石見重蔵が戦場の直中に放り出された日は、二方面で激しい戦いがあった。一方は道明寺・誉田方面であり、後藤

基次、薄田兼相が倒れた。もう一方は八尾・若江方面であり、木村重成が倒れた。

この二方面での敗退により、豊臣方の敗勢は覆し難いものとなった。大坂城に籠もる将兵の誰も、沈みかけた太陽を再び中天に昇らせることは不可能であると悟ったことであろう。

しかし豊臣方には、なお数万の兵力があつた。冬から夏に至る大坂の役で、自身未だ敗戦らしき敗戦を経験していない真田信繁は、この時点においても意気軒昂としており、大野治長や明石全登、毛利勝永等と共に明日の作戦を練っていた。

徳川家康を頂点とする寄せ手の将兵は、大坂城に割拠する豊臣方を烏合の衆と罵る。なるほどその通りであろう。しかし信繁の見るところ、徳川方とて一枚岩ではない。伊達も前田も藤堂も、家康を恐れ、徳川への忠義を示したいがために参陣しているに過ぎない。彼らにとつてこの戦いは家を興す戦いではなく、家を守る戦いなのである。

では、家康が死ねばどうか。一見、強固に連帯している徳川方も、家康という大楔が抜かれれば、轟音を立てて崩れ落ちるに違いない。後継の秀忠では、諸将をまとめられまい。その観点に立つて、信繁は作戦を練り上げた。

まず、寄せ手を四天王寺周辺の狭隘な丘陵地に誘い込み、釣られた寄せ手を順次に撃破する。寄せ手の陣形が伸び、薄くなった本陣に、明石全登率いる別働隊が決死の覚悟で突入する。別働隊が家康の首を挙げれば上々、首を挙げられずとも家康本陣が壊滅乃至混乱すれば、誘い込んだ豊臣方が反転攻勢し、浮き足立つ寄せ手を完膚無きまでに叩く。

この作戦が的中すれば、豊臣はあと十年生き長らえるだろう。その間、徳川傘下の外様大名を煽動しつつ、機に臨み、変に応ずれば、天下を引き寄せることは適わずも、摂津・河内・和泉を中心として近畿に盤踞し、徳川も手の出せぬ一大勢力を築くことが可能となるう。

作戦を的中させるための最大の要は、総大将の出陣である。真田信繁等諸將の意気がどれほど高かろうとも、前線に立つ部隊長や兵の士気が低くては話にならない。彼らの士気を万丈に高からしめるには、関ヶ原前哨戦に始まる豊臣斜陽の戦いにおいて、未だ馬印を蒼天に立てぬ豊臣秀頼の出陣が不可欠であった。そのため真田信繁等はこそつて、秀頼に謁見したのである。しかし、火傷しそうな熱気を湛えた信繁が膝を詰めようと、秀頼は出陣の明言をついに与えなかった。信繁の怒りと悲憤はここにある。

「秀頼様のご出馬遊ばされれば、士気を挙げるのは我が将兵だけではない。寄せ手も一攫千金と殺到してこよう。秀頼様に万が一があれば、豊臣は終わりだ」

重蔵にすれば、倒壊しようとしている大木の枝でその果実を抱きかかえている男の言としか聞こえぬことを言つて、勝永は隼蔵等を手招いた。それに応じて、隼蔵は勝長の背に続いた。しぶしぶ、重蔵も隼蔵に倣った。

果実を守りたければ、それを抱いて大木から飛び出さねばなるまい。さもなければ、倒壊する大木に果実ごと潰されるだけである。大木の倒壊は先のことではなく、今日でなければ明日という間近さなのである。

そうこう考えているうちに、重蔵は、十畳足らずの小部屋に入った。豪華絢爛な大坂城本丸御殿で、隠されたようにひっそりとした一室である。

勝永、隼蔵、重蔵が座ると、左手の襖がすつと開き、二人の人物が入室した。何気もない入室に、重蔵はさほどの重要人物とは思わなかったが、彼らこそ、この城の主であった。

最初に入室した人物は、所作涼やかな青年である。勝永の正面に座り、隼蔵、重蔵と見て、爽やかに笑った。人を魅き込む笑顔である。

「豊臣秀頼です」

人物はさり気なく名乗った。知力と胆力を感じさせる声である。

豊臣の主は暗愚と聞いていたが、この声の主が暗愚であるはずはない。いやそれよりも、天下人秀吉の後継で、正二位右大臣にまで昇った人物が、重厳ごとき素浪人に惜しげもなくその玉体を晒していることが、重厳には驚きであった。横柄とも傲岸とも無縁で、対等の立場で話そうとする秀頼の姿勢に、重厳は清らかな風を感じた。

「石見重厳殿でございますね。貴殿の盛名は、勝永殿と隼蔵殿から聞いております。貴殿とは秀頼個人としてお話し致したく、このような部屋に案内いたしました次第。どうか平にご容赦願いたく」

秀吉は人蕩ひとたらしの名人であった。赤心を真つ直ぐ相手の腹に置く術は、遺伝として秀頼に伝わっているらしい。不覚にも、重厳は心の鐘を鳴らされてしまった。元々、情には感じやすい質である。

ところがその爽やかな感動を吹き飛ばしたのが、遅れて秀頼の隣に座った人物である。

何という艶やかさであろうか。男の盛りを過ぎた者でさえ、彼女を前にして男の情熱を取り戻さぬ者はいまい。秀頼の妻である千姫こそ彼女かと思っただが、

「母です」

と秀頼に告げられ、重厳はいよいよ驚いた。

秀頼の母と云えば淀の方である。蒙昧高飛車で、女だてらに政治に口を出し、豊臣の斜陽の一要因とも云われる人物と、重厳は聞いていた。しかし今、白い頂を眩しく見せて会釈する彼女には噂の陰も窺えない。秀頼の印象も合わせて、人の噂の頼りなさを今更ながらに痛感した。

流石に天下人の心を捉えて離さなかつた美貌であるが、何よりも驚嘆すべきは、その天々（わかわか）しさである。秀頼の母であれば、四十を越えているはずであり、いかな佳人であろうと美しさに陰差しておかしくない年である。だが彼女は、時など忘れたといわんばかりに、肌は瑞々しく、咲いたばかりの花の美しさである。そしてその豊かな唇は赤く濡れて、名を呼ばれるだけで、背骨に痺れが走りそうであった。

淀殿の赤い唇が、重葎の記憶を鋭く呼び起こした。夕闇の四天王寺に明滅した宵螢。凜々とした鈴の音。陽炎のように浮かんだ赤く濡れた唇。現から夢に替わるその狭間の朧に見た妖艶な女が、淀殿に重なる。

「何をお考えかえ」

淀殿に目を深く覗かれて、重葎は視線を逃がした。

「さて、石見殿。貴殿にお越しいただいたのは他でもない」

と、勝永が切り出した。重葎と淀殿との間に醸し出された妖しい空気が、流れた。

「貴殿の腕をお見込みして、秀頼様の警護をお願いしたい」

同趣旨の依頼を聞いたことがあると思いつつ、

「腑に落ちぬことがござる」

と、重葎は言った。

「拙者はなぜか伊達兵と真田兵の間におり申した。拙者が伊達兵を斬ったのは、伊達の槍が真田よりも速かったからでござる。拙者が秀頼公の御前に見えてござるのも、拙者としては魑魅魍魎に誑かされた心地にござる。拙者がそうであるのに、秀頼公も勝永様も拙者をご存じであるかのような仰せ様。誠に得心が参りませぬ」

重葎の疑問に、勝永はさもあろうとばかりに首肯した。

「貴殿が本日現れたことは、我らにとってはまさに僥倖。剣名はかねてより聞き及んでおり、秀頼様のお側にあればどれほど心強いかと恋い焦がれておった次第」

「夢が現となつたわけにござるな」

「いかにも」

「なれど、なお合点が参りませぬ。突然現れた拙者を、なにゆえ石見重葎その者と知つたのでござろうか。誰にも素性を改められたとは記憶いたさぬが」

「それは」

勝永は隼蔵を一度見て、

「隼蔵殿に依頼し、かつて貴殿の近辺を探ってもらったことがある

からでござるよ。失礼なこととは存ずるが」

あながち失礼とも思っておらぬ顔で、勝永は種明かした。勝永からずらした視線の先で、隼蔵が軽く笑った。

「隼蔵殿から貴殿が突然現れたと聞き、我ら、小躍りしており申した」

勝永は真顔で言った。この大柄で武張った男が小躍りする様は、あまり想像できぬ重蔵であった。勿論、勝永の言を全面に信ずるほど、重蔵は単純ではない。勝永の腹中には、一物も二物も隠されているに相違ない。相違ないが、それを探る気はない。端的に言えば、興味がなかった。

「今一つお聞かせ願いたい」

「なんなりと」

「秀頼様の警護と申されたが、僭越至極ながら、秀頼様個人のお身を案じている情勢ではないと理解してござるが」

さすがに勝永も顔色を変ずるか、重蔵は思った。確かに変わったが、険色ではない。より柔和な容貌となった。賢しい若輩を導こうとする長者の貌かおであった。

「石見殿、未曾有の大兵を集めたこの戦、間もなく終わるとお思いかな？」

「明日でなくとも、数日とかかりますまい」

「ところが左にあらず。一見が真実とは限らぬ。戦はこれから始まるのでござる」

重蔵は勝永が嫌いではない。いかにも進退清らかな風貌は好感が持てる。しかし、勿体を付けた言い回しに、少々飽きてきた。重蔵、気は長い方ではない。

「豊前殿」

艶やかに、淀殿が言った。

「そのような申し様では、重蔵殿のお心には響きませんまい。なあ石見殿。御身様は得心の参らぬことには挺でも動かれぬお方ゆえなあ」  
淀殿の流し目に捉えられると、男の本能が熱くなる。重蔵は、淀

殿の目と唇にはあまり見入らぬがよいと、己に警告した。

「妾からも是非ともお願い致します。豊臣も徳川もなく、一人の母として、たとえ明日散る命であろうとも、今宵一夜の安寧を我が子にと願うは適わぬことございませうか」

淀殿の言葉は真実であろう。その声に妖しさはなく、重蔵は、母親の祈りを聞いた気がした。

「子を思う親の心、重蔵殿であれば汲んでくださいますよ」

淀殿は長い睫を伏せた。重蔵を信じていると、閉じた目が言っている。淀殿の母としての心に、重蔵は応えてみたくなった。いや、応えずにはおれなかった。重蔵のその心の作用を見越していたのだとすれば、やはり淀殿は妖女であろう。

「秀頼様のご安寧、お守り致しますよ」

重蔵はついにそう言った。

本丸御殿を退出して、重蔵は、本丸郭の櫓の前に立つて、見上げた。砲弾に破られた櫓の白壁から、月とその側の星が見えた。白壁の穴から射す月明かりの溜まりに、重蔵は孤影を置いた。

鉄砲が勝敗を左右する戦場は、剣に生きる重蔵には魅力の薄いものであった。国崩や南蛮渡来くわんぱんの石火矢が登場するに至っては尚更である。誰かのために剣を振るうのは、重蔵には随分と久しいことである。

重蔵の影を踏んで、隼蔵が側に立った。彼も櫓の破れからの星を見た。

「明かしておらずに、悪いことをした」

と、隼蔵は謝罪した。かつて重蔵の近辺を調査していたと勝永が話していた件だ。

「構わぬ。どうせ他にも明かしておらぬことがあるよ」

重蔵が視線を向けずに言うと、隼蔵は鼻の奥で笑った。

「その時となって話した方が良いこともある」

「そんなものか。ところで」

重蔵は隼蔵を見た。重蔵に詰問する素振りはない。霧の中にいる

隼蔵や毛利勝永等を受け入れる余裕がある。

「お主は拙者に、鬼のようなものに出会わねばならぬと申したな。それは誰であったのだ。淀の方か。秀頼公か。毛利豊前殿か。それともお主自身か」

重蔵にとつて、その誰もが霧の中の住人である。誰が鬼であると構いはせぬが、興味はある。

「お主は何と見た」

予想どおり、隼蔵ははぐらかした。それを重蔵は受け入れた。

「お主の働きは夜明け以降となるう。今のうちに十分休んでおけ。といっても兵に混じつてごろ寝しかできぬがな」

隼蔵はそう言い残して、破れた櫓の白壁から射す月明かりの円から去った。重蔵は円に残った。

そこで星を見ていると、再びあの鳴動が足元を突き上げた。鳴動に続いたのは血を吐き尽くすようなおぞましい喊声である。重蔵は身震いした。初回ほどの驚きはないが、背を這い上がる冷たさは同じである。

鳴動と喚声が止んだ。

不可解な城である。それでも破れた櫓の白壁から垣間見る星は美しい。重蔵も、月明かりの円から姿を消した。

孤影集結(一)(前書き)

石見重蔵は豊臣と徳川の戦いの最中に放り込まれ、不本意ながら豊臣に与することを余儀なくされる。重蔵の記憶に残る鈴の音と宵虫の明滅。重蔵を導いた者は誰なのか。それを探るため、隻腕の忍び隼蔵と共に、重蔵は大坂城に入城する。城の夜を揺るがす鳴動は何なのか。鬼を雇ったのかと問う重蔵に、隼蔵は鬼のような者の下へ案内するという。大坂城の一室で重蔵の前に現れたのは豊臣の当主秀頼と、妖艶な淀の方であった。

## 孤影集結（一）

その日の戦いが終わり、日本一の兵もついに斃れた。この日を境として、歴史は二百年に迫ろうかとする武の時代を偃せ、平らかなる時代へと転換した。戦乱の最後を飾るに相応しく、壮大に、華やかに戦絵巻を描いて、慶長二十年五月七日は暮れた。

家康は死すら覚悟したという。真田勢の呐喊突撃により家康の旗本勢は混乱し、潰走した。家康の馬印が倒れたのは、三方ヶ原以来のことだという。真田信繁の本願が、家康の馬印を倒すことであつたはずはなく、また倒したことによって信繁が武田信玄に匹敵したわけでもないだろうが、歴史の転換点をヒロイックに演出したことで、信繁は以降四百年を経ても、なお英雄の一人として語られる資格を得たのである。

さて、摂津の上町台地に数十万を集めた大坂の役は、天王寺と岡山戦の戦いをもって終わった。徳川方十五万、豊臣方五万、総勢二十万という兵力もさることながら、膨大な火力が集中したこの両方面の戦いは、大地を割らんばかりの大激戦であつた。

豊臣方は城をほとんど空にして、天王寺方面には真田信繁率いる諸隊が茶臼山に、毛利勝永が四天王寺に布陣し、岡山方面には大野治房率いる諸隊が展開し、全軍の後詰として大野治長、七手組が控えた。

対する徳川方は、茶臼山方面に浅野長晟と大和路勢を配して真田への備えとし、天王寺方面には本多忠朝を先鋒に榊原康勝、酒井家次等を展開して、その後に家康自身が本陣を置いた。岡山方面には前田利常を先鋒として、井伊直孝、藤堂高虎、細川忠興が旗旗を並べ、その後に徳川秀忠がこの方面の本陣を置いた。

豊臣方は当初、徳川勢を四天王寺の狭隘な地形に誘い込み、順次撃破する戦術であつたが、正午過ぎ、毛利勝永勢の本多忠朝勢への銃撃により戦線は一拳に煮え立ち、たちまち大混戦となつた。極度

に集中された火力は、一陣の備えを瞬く間に破壊する。一斉砲火は各地で指揮系統を寸断し、大兵を擁する徳川勢の布陣に、多くの亀裂が生まれた。その機を見逃さなかったのが、毛利勝永である。

毛利隊は敢然と突撃し、天王寺方面徳川方先鋒の本多忠朝隊は壊滅。小笠原隊、榊原隊なども壊乱して、獰猛な獣と化した毛利兵の眼前に、家康本陣が丸出しとなった。

豊臣家に最後まで残されていた牙の一本が、家康本陣に食い込んだ。もう一本の牙である真田信繁隊は松平忠直隊を突破し、毛利の牙に苦しむ家康本陣の横腹に、猛然と噛み付いた。

廃れたりといえど、一度は天下を治めた豊臣家、残された顎門あぎとは強靱であった。腸を食いちぎられた家康本陣は、のたうちまわり、潰走した。家康の馬印が倒れた。ここにもう一本、毛利、真田に続く牙があれば、歴史は大きく異なっていたであろう。前日の戦いで、後藤基次、木村重成等の将星を失っていたことが、豊臣方にとつては痛恨であった。

岡山方面でも大野治房等の豊臣方が奮戦し、徳川方先鋒の前田隊を突破、秀忠本陣を襲った。

この時、豊臣方にはなお後詰の兵力が一万数千あった。その兵力を機に臨んで有効に活用し得ておれば、歴史の行き先を指し示す羅針盤の針は、大きく振れていたことだろう。しかし、戦国における多彩な戦いでも例を見ない多大な火力の集中は、徳川方にもたらした混乱を、分け隔てなく豊臣方にも生じさせた。

元々、四天王寺周辺の狭隘な丘陵地帯に誘い込むのが戦術の主眼であり、真田隊や毛利隊の呐喊突撃は、後詰部隊の大將である大野治長の認識になかったであろう。もちろん、戦いが机上の理論通りに推移することの方が稀であろうが、前線の状況が、治長に正確に伝わらなかつたと想像できる。

その時代に生きた者の真実はどうであれ、歴史の事実によれば、家康に死を覚悟させたと云われる真田信繁隊は、態勢を立て直した徳川勢の反攻により壊滅する。信繁自身は、安居天神の境内で討ち

取られたと伝わる。

岡山方面の大野治房勢は井伊勢等に押し戻され、戦線全てに渡って徳川方が攻勢をかけた。この展開となれば、圧倒的な兵力を持つ徳川方に、豊臣の諸隊は有効な反攻策が取れず、一陣ずつ潰走していった。そして、午後三時頃となって、唯一戦線を保持していた毛利勝永隊が退却するに及び、大坂の役の最後にして最大の合戦が終わったのである。

通常、慶長二十年五月七日の日没後は歴史上、鮮やかな文字で浮かんでこない。翌日未明に、秀頼と淀の方が、松平忠直勢を筆頭とした寄手の将兵で蹂躪された大坂城の一隅で自決したことを記すのみである。

その数時間にこそ己を賭けた者達もいた。

十河一虎そごうかずとらは、槍を取っては並ぶ者なき自負を持つ男である。時が時であれば、いずれに割拠する大名の下でも、名の知れた侍大将となっただけの男である。鉄砲の出現により、戦場に興味をなくした男の一人でもある。

その一虎、欠伸をかみ殺した。戦いに疲れ果てた偉大な城影を眺めるのは嫌いではないが、夕映えが夕闇となるまでとなると、さすがに興がもたぬ。一虎は大地に屹立させていた大身の槍を左手に掴み、石突付近を蹴って槍を横たえ、すかさず柄に右手を添えて虚空を数度突いた。穂先に巻かれた風が唸って、低木に繁る初夏の葉を騒がせた。

「焦りは禁物ぞ」

不意に現れた影が、一虎の背に言った。窺めるようであるが、揶揄するようでもある。

「焦ってなどはおらぬ」

一虎は、背後に寄る影が何者であるかを承知しているらしい。焦ってはおらぬが、大坂城内に松平勢が突入して随分経つ。城を舐める炎の臭いを嗅ぐ近さにありながら、彼の求める獲物を何も知らぬ雑兵輩に横取りされては、腹が治まらぬ。

「他の者はどうしておる」

一虎は影に背を見せたまま、槍を肩に担いだ。雑兵の持つ数打ちの槍ではない。鉄筋を幾重も束ねた剛槍である。しかし、この男にかかれば、小枝のように扱われる。

「各々、下知を待つておる」

影はようやく一虎の視界に入ってきた。が、背後にいてもあまり変わらない。夕闇が夜と言って良い暗さであることを考慮しても、黒い陽炎のように立つ姿は顔色も窺えぬ。瘦身で背が高いということだけは分かる。

得体の知れぬ奴、とは思うが、かと言って、一虎自身、経歴をおおっぴろげにしているわけではない。一虎をはじめ、得体の知れぬ者共が六人、大坂城に忍び込もうというのである。

「お主は生玉口より城へ入れ」

黒い陽炎が言った。

「それは我等の雇い主からの陣触れか」

「お主が二心を抱く者でなければ、そうなる」

黒い陽炎は、一虎を少しからかってみた。その企てを軽く流した一虎には、些細なことながら確認しておきたいことがあった。

「その下知を受けるのは、俺が最初か」

「そうだ。お主は、先駆けが好みであろう」

「好かぬ奴だが、武士の心ものぶの一片は承知しておるものとみゆる」

小鼻で嗤った一虎は、肩に担いだ剛槍を頭上で一旋回すと、右の小脇に抱えた。穂先に生じた旋風に乗ったものか、黒い陽炎は不意に消えた。

一虎は駆けた。咆哮しておれば、まさに狂虎のごとくであった。ただろっ。

一方、石見重厳いわみしげひらは、月を愛でている。銃痕が穿たれ、石火矢に崩された塀は無粋だが、満ちた月を栄盛と見れば、荒れた白塀は枯衰と見えて、そこにはそれなりの趣が有り、一句詠めそうであった。横倒しとなった櫓の剥き出しの礎石に腰掛け、愛刀を脇に置いて、

懐手に歌才を絞り出そうとしている。

忌々しいのは城内の騒がしさだ。松平勢が雪崩れ込み、豊臣当主の一攫千金の首を求めて、大坂方の残兵を駆逐している。本丸御殿は阿鼻叫喚の地獄絵図だが、差しあたり、重蔵のいる山里曲輪はまだ地獄に堕ちていない。

重蔵が己の歌才の乏しさに気づきかけたとき、猛烈な殺気が南から重蔵を貫いた。突風のごとくである。凄まじい気配を纏った何者かが、迫っているらしい。見えてみたい誘惑に駆られたが、止めた。生玉口は重蔵の受け持ちではない。そちらにはそちらの担当者がいるはずである。重蔵の受け持ちは北の青屋口であった。

ふと、視界の景色が変わった。情景が一つ増えている。増えたのは、腰つき柳々とした天い女の姿態である。月明かりを背に負って、絵画のような美しさは、なかなか荘厳である。思わず見入った重蔵は、こちらの受け持ちは当たり前だったと喜んだ。

破れた白堀に立っていた天い女が、ふわりと舞い上がった。と、鋭い物が飛来した。瞬時に愛刀を手掴んだ重蔵は、弾けるように飛んだ。重蔵の残影を貫いて、礎石に二本の飛刀が突き立った。巨大な櫓を支える礎石が柔らかいはずのないことを考えれば、深々と立った飛刀の威力が知れる。

重蔵が地に降りても、天い女はまだ夜の中空にいた。ゆとりの多い装束の布が風を孕むのか、天い女の肢体は、重力を無視しているが、滑るように降下している。

天い女の足が地に触れるその点に、重蔵は猛烈に踏み込んだ。鞘内を刃が滑り、白い光刃が発せられた。砂埃が激しく舞った。しかし、抜き打った重蔵に手応えはない。天い女は体重を地に落とすことなく、再び飛んだのである。

危険を本能で察知した重蔵の左頬を、灼ける痛みが走った。飛刀が一本、背後の白堀を豆腐のように貫いた。

左手の甲で頬の血を拭った重蔵は、

「女が男を貫く道理はあるまい。男が女を貫くものだ」

と、見当違いな憤りを口にした。

「下品な奴。ここの受け持ちは外れのよう」

重蔵の感想とは逆を言つて、天い女は眉を顰めた。その顰めつぷりがまた男の情熱をそそるが、二人の邂逅は、生憎と意気投合とはいかなかった。

「石見重蔵、お相手仕る」

重蔵は、刃を斜め上に向けた下段に構えた。投じられた飛刀を下から弾き、返す一刀で斬る算段である。

「天戸朝霧が推参なり」

天い女は名乗りを挙げると、両手で夜天を支え、曲げた左膝を腰の高さに上げた。そこから始まつた舞いは華麗である。神代、天岩戸に隠れた天照大神を誘い出した天細女命の舞いがこうであったかと思わせる。時に力強く、時に官能。男の感情が、重蔵の体内で騒がしくなつた。

艶やかな女との縁が強くなつたらしい。宵螢の女に淀の方。そしてこれから刃を交える天戸朝霧。誰もが美しく、そして食虫花の危険に満ちている。

重蔵は半足、間合いを詰めた。誘いである。美しく舞っていた華は、一転、鋭い刺を放つた。投ぜられた飛刀を下から弾いて、重蔵は裂帛の気合で斬り下げた。手ごたえはなかつたが、血が花卉が散つたと錯覚したのは、重蔵の頭上を飛び越えた朝霧の赤い袴が剣風にはためいたからである。

中空で身を翻して、朝霧は重蔵の背後を取つた。朝霧の両手に、飛刀が殺意に紅く輝いた。瞬間、腹部に生じた衝撃が四肢の先までを貫き、飛刀は空しく虚空に弾けた。重蔵の靱尻が、朝霧の左脇腹を痛打していたのである。

「影走りは身を両断する技ではないが、骨が砕けたであろう」

重蔵は背中と言つた。朝霧に向き直るつもりはない。刃が朝霧を見据えてしまつては、重蔵は欲さずとも愛刀が女の血を吸いたがる。重蔵の背を見たまま後退するのであれば、朝霧を追いはせぬ。

呻く朝霧の声が聞こえた。朝霧の殺気が薄まった。が不意に、悍ましい程の殺気が二つ、重葭の背を襲った。

堪らず背を返した重葭は、迫り来る二匹の鬼を見た。赤銅色の肌に黄色い眼光。鋭い爪が達するよりも疾く、重葭は二匹の鬼を斬り捨てた。両断された鬼は、月光にも映えた白い紙片となって、夜の底に浮遊した。

「天戸朝霧、油断であつたな」

発せられた声の軌<sup>わだち</sup>を追うと、山里曲輪の古木の枝で不確かに揺れる、黒い陽炎が見えた。

「石見重葭、決して一人で戦つてよい人物ではないと教えたはず」  
黒い陽炎は朝霧を窺めた。朝霧の上位となる者とみえる。黒い陽炎が人であるとするならば。

黒い陽炎の眼が赤く灯った。重葭を見据えているらしい。  
曲輪に降り注ぐ月光が、俄に禍々しくなった。

## 孤影集結（二）

その国は隠し国とも呼ばれる。四方を囲む深い山が霧を生じさせるからだろうか。古くは伊勢国の一部だったが、律令時代に分立された。格は下国であったので、あまり豊かな国ではない。

室町時代に下って、守護仁木氏の支配を受けるが、早くから惣を形成していた国人は、飼い馴らされることはなかった。

栄養の乏しい土を耕しても得られる財に限りがあることを知っていた国人達は、時代が荒んで行くに従って、他国の有力者に進んで財を投じさせるべく、各々の惣で独自の技術を磨き上げた。日常は鋤を持つ彼らは、依頼があり次第に、百姓の装いを脱ぎ捨てるのである。

彼らのその独自の技術が、六十余州の下国にすぎないその国を、最も著名な国の一に成り上げたのである。その技術とは忍術であり、その国は伊賀といった。

また、その伊賀国と山を介して隣接するのが甲賀である。甲賀は国ではなく、近江国の一郡であるが、痩せた土地は伊賀に同じであり、そこに住む人々も日々の糧を得て、子孫を継いでいくために、忍術を磨き上げた。

伊賀と甲賀。共に忍びを生業とする者の多い土地柄であるが、彼らが互いに反目し、敵視していたと見るのは誤りである。少なくとも、天正伊賀の乱が勃発するまでは、両者は友好的な協調関係にあった。同様の理由から同様な技術を身に付けた彼らが、あえて反目せねばならぬ理由はない。隣人は喧嘩するよりも協力した方が得る物が多い。

伊賀対甲賀の構図が描かれるのは、本能寺の変により織田政権が崩壊した後、徳川が伊賀を取り込み、その徳川の諜報能力に対するため、豊臣が甲賀を取り込んだ後となる。

さて、惣を中心として仁木氏の支配を受け付けなかった伊賀国人

であつたが、その独立不羈は、あの男には通じなかつた。織田信長である。信長は中途半端はしない。彼の軍勢は、伊賀一国を全く平定した。後世に第二次天正伊賀の乱と伝わる騒動で、伊賀忍者は、国を持たざる者と成り果てたのである。

元々、伊賀国に食指を動かしたのは、信長の子であり、伊勢北畠氏を継いでいた信雄であつた。信雄は信長の許しを得ず、勝手に軍勢を動かしたものの、敗北してしまふ。これが第一次天正伊賀の乱であるが、この責任を、信雄が信長から厳しく糾されたことは当然である。

伊賀国は惣体制の下、長らく良く治まっていたが、完全に一枚岩というわけではなかつたようで、一派の国人が信雄の耳に甘い言葉を囁いた。その囁きを奇貨とした信雄は、さつそく伊勢と伊賀の国境にある丸山城に戦支度をさせた。信雄、当然この時点で、まさか敗れるとは思ひもよらなかつたであらう。

戦の匂いが充満した丸山城を二人の忍びが見下ろしたのは、天正六年七月二十五日のことである。

二人はどちらも若い。十五を越えているとは見えない。

「なかなか壯観ではないか、千余の武者首が揃うというのは」

彩り鮮やかな旗旗が立ち並ぶ丸山城を、見世物のように眺めるのは菊地清九郎。伊賀者である。一方、黙然と厳しい視線を城内に注ぐのは、高峰隼蔵。甲賀者である。

隼蔵は煮え立つ騒ぎの織田将兵が気に食わない。彼らは国境を侵そうとしている。寇掠者こうりやくしやは、罪の暗さに無言であるか、侵される側の悲哀に思い至る殊勝さを持たねばなるまい。だが彼らの浮かれ様はどうか。彼らが土足を踏み入れようとする国に、侵略者を撃ち退ける矢はないと奢っているのだろうか。

隼蔵は、丸山城を見下ろす眼の怒色を強くした。

「力むな。力んでは身が強ばる。何も背負わず、何も思わず。それが肝要だ」

清九郎が隼蔵の肩を抱くようにして叩いた。年が一つ上の清九郎

が兄貴格で、二人は幼い頃から仲が良かった。伊賀と甲賀、住む里は異なるが、互いに切磋琢磨し、忍びの術を磨き上げた。清九郎と隼蔵の関係は、丁度伊賀と甲賀の關係に似ていた。

甲賀の忍術は、近江を支配していた六角久頼の時代に

萌芽の時代を迎えた。中心となる甲賀五十三家のうち、六角氏が危機を迎えたカギの陣で特に目覚ましく働いたのが甲賀二十一家であり、甲賀の里の中樞を担う一族であった。その一つに高峰家があり、隼蔵はその家の血を引いていた。

隼蔵は、忍術の純血者である。嫡子ではなかったが、伊賀の上忍である柘植氏の郎党の子に過ぎない清九郎とは、血の重さが違った。血統に差異はあったが、二人はそれを意識したことはなかった。まだ若かった。

「日が落ちるぞ」

重畳と連なる伊賀の山影の空はまだ薄朱かったが、清九郎が予告してしばらくもせぬうちに、山影は夜に隠れた。

城のあちこちで、篝火が燃え始めた。薪の爆ぜる音が聞こえそうなほど、周囲は静かになった。風が強くなった。

爆音が静寂を破った。篝火に仕込まれていた火薬玉が炸裂したのだ。隼蔵には、城の数力所で、炎の手足を八方に広げる火薬玉が見えた。それが合図だった。

「ゆくぞ」

と、清九郎は目で言った。隼蔵は目で応えた。

二人は厚く織った黒羅紗の上部両隅を、手甲を巻いた手に握った。下部両隅は脚絆を巻いた両足首に繋がれている。

二人はほぼ同時に地を蹴った。蹴った先は、丸山城を見下ろす断崖の虚空である。強い風が黒羅紗に揚力を与え、布袋の布を背負ったように、隼蔵と清九郎は滑るように、丸山城へ落ちて行った。

ヒュッ、ヒュッ、と風が二度鳴った。城内千余の将兵のうち、本営近くにいた二人が喉から血を吹き上げて倒れた。その側に、二つの影が突き立った。隼蔵と清九郎である。『野臥間』の術により夜

空を滑空した襲撃者二人は、落下の速度を厚く織った羅紗布の空気に抵抗で減速しつつ城内に侵入し、羅紗布を掴んでいた両手を離すや短刀をきらめかせて、千分の二となった不幸な兵を斬殺したのだ。

篝火の爆発で混乱する城内である。夜闇から飛来した襲撃者に、迅速に対応できない。侍共は鬼か、天狗かと騒ぎ立ち、羅紗布と足首を結ぶ紐を解くや素早く胸に巻いて駆け出す隼蔵と清九郎を止める者はいなかった。

そこへ、城外に潜んでいた伊賀衆、甲賀衆が大手と搦め手に攻め掛かった。数百程度の兵勢であったが、城内は浮足立っている。たちまちにして大手門を突破され、城方は退勢に陥った。

隼蔵と清九郎は城主である滝川雄利（たきがわかつとし）の首を追った。綺羅な具足を着込み、常時は忍び者を半農半兵と嘲っている侍の首が、面白いように取れた。二人は城兵にとって、黒い色の災厄であった。

だがしかし、流石に城主を囲む旗本勢は頑強で、竜巻のごとき黒い災厄をがっちり受け止めた。

隼蔵と清九郎の前に壁となった旗本侍は十名余り。一騎一騎が、他力を頼ることない武人と見えて、手ごわかった。それでも清九郎の投じる手裏剣は正確無比に侍の具足の透き間に突き刺さり、弱ったところに隼蔵の短刀が止どめを刺した。隼蔵と清九郎の連携作業は精密な絡繰細工を想わせる。人の命を刈る絡繰細工である。

二人は旗本を突破した。しかし、すでに城主の滝川は城を落ちていた。逃げ足は速いらしい。それは嗤うべきことではない。

隼蔵と清九郎は城主を追わなかった。旗本侍に負わされた槍の裂傷がいくつもある。城を落とすのが第一であり、それは確実に達成されつつある。

四半刻もせぬうちに、丸山城内の織田兵は悉く駆逐された。伊賀一国の支配を目論んだ織田信雄の食指は、緒戦で痛く傷つけられることとなった。

信雄が兵を盛り返してくることは明らかであったが、伊賀衆も甲

賀衆も、一先ずは勝利を祝った。なかでも、たった二人で城内を混乱させた隼蔵と清九郎は、大いに称えられた。双方ともに年若く、将来の伊賀と甲賀の忍術を支えて行く者と囑望された。

その夜の酒は美味かった。隼蔵は、彼の中で記憶となった酒の味を思い起こしていた。その夜と同じ匂いがする。戦が終わり、軽く死臭が混じった風の匂いだ。

隼蔵は、慶長二十年の大坂城にいる。今宵、彼の持ち場は西の京橋口である。城内に殺到し、豊臣家主の千両首を求める松平勢の立てる騒動に混じって、山里郭で剣激の音が聞こえた。そちらでは、既に始まったらしい。

こちらでも、じき始まりそうな気配を、隼蔵の感覚は掴んでいる。隼蔵は左方向の闇を見た。そこに神楽が立っている。全く気配を感じないが、それでも神楽舞の衣装を纏った少女は確かにそこにいる。

神楽も京橋口にて、侵入者を迎撃する一人である。隼蔵と組ませたのは、毛利勝永の差配である。京橋口方面の侵入者は二人だと、勝永は言い切った。それで、迎撃側も二人にしたのだろうか、なぜ神楽を配置したのかが分からなかった。

神楽の力量を危ぶんでいるのではない。神楽の横顔が、隼蔵の意識を引き付けるのである。少女の顔は良く笑うが、生気に欠けながらもそのあどけなさが、隼蔵の記憶に触れ、彼の心を騒がしてしま

う。  
勝永の意図は何か。と推測しかけて、隼蔵は自分を嗤った。自分から京橋口の受け持ちを勝永に志願したのではなかったか。この方面の侵入者の一人があつた男だと勝永から聞かされた時、隼蔵は、迎撃者の一人は必ず自身でなくてはならないと強く感じたのだった。月は冴え冴えとしている。何度も眺めたであろう人の栄枯盛衰を嗤うようでもあり、哀しむようでもある。

どこからともなく去来した一片の雲が暫時、月を隠した。再び世界の闇が払われた時、京橋口の情景に二つの要素が増えていた。

隼蔵は跳躍した。鋭く虚空を貫く音が、足下を走った。隼蔵はまさに隼のごとしである。一跳躍で五間はあるうという距離を一度に詰めた。その疾さは稲妻である。

激しく火花が散った。隼蔵の斬激は、しかし、侵入者の刃に弾かれた。火花をかき消して、手裏剣が飛んだ。蚊みずちが水底を行くように、身を低くして手裏剣を躲した隼蔵は、低空から侵入者を襲った。

再び火花の散華。刃と刃が噛み合う焦げ臭い匂いが立った。大地をしつかりと踏み締めた今度の斬激を、侵入者は弾くことができない。両者は、互いが互いの目を見た。

侵入者は初老の男であった。黒装束を着込み、刻まれた皺は多いが、眼光は剛く、膂力も強い。初老の侵入者は、隼蔵の剣圧を受け止めつつ、己の投じた手裏剣を二度も躲した男を愛でるように見た。その目が、数瞬と経たぬうちに疑惑と困惑に揺れた。

初老の侵入者は、跳んで後退した。隼蔵は追わず、代わりに、「衰えておらぬではないか、清九郎」

と言って笑い、古い友人を驚かせた。

「隼蔵か」

初老の侵入者は絶句した。彼が口にした名の男は、彼の記憶の中では死んでいる。殺したのは他者でなく、彼である。初老の侵入者は、確かに清九郎であった。

「驚いたな」

こぼす言葉とは裏腹に、清九郎は既に驚きを臍の下に押さえ込んでいる。戦う姿勢を解き、体を脱力させてはいるが、殺気はむしろ濃い。

「お主が生きておったことは、とりあえず重畳と祝っておこう。だが、その姿は面妖と申すほかない」

清九郎は忍道をひた走るうちに齢五十を越えた。だが、古い友人の姿はどう見ても三十代前半であろう。二十年の時間の齟齬に清九郎は驚きつつも、受け入れた。忍道は、人の裏道である。五十有余年も彷徨っておれば、摩訶不思議にも遭遇する。

「地獄の鬼は思いの外に気が利くものとみえる。ただ地獄から放りだすだけでなく、血の池に沈んでいた間の時も返してくれたようだな。それともお主がいたのは極楽か」

清九郎の軽口は久しぶりである。隼蔵はそれを懐かしさではなく、怒りと共に聞いた。しかし、怒りは臍の下に抑えている。互いに、感情の制御は弁えている。

「生憎と地獄の鬼にも極楽の仏にも逢うてはおらぬ。だが、地獄の炎よりも、極楽の護摩よりも、貴様が俺に背負わせた怒りは熱く激しくこの身を苛んだ」

隼蔵は残された腕を突き出し、短刀を掴んだ手を堅く握り締めた。「儂がお主を裏切つて、安穩とした日々を送つて来たと思うのか」

「口上は無用。貴様は俺にそう教えたはず」

「友を二度殺さねばならぬとは、酷な因果よ」

「心配致すな。俺は貴様を友とは思つておらぬ」

「それは結構」

清九郎は鼻先で嗤った。一瞬、寂寥が容色に過つたが、それを悟られぬ疾さで、清九郎は眼光の凄みを増した。人を殺めて顧みぬ者の顔になつた。

無言で投じた手裏剣が夜闇に飲み込まれ、その鋭利な刃に貫かれるはずの隼蔵は、月を背負つて中空にいた。隼蔵の残された腕から放たれた閃光が清九郎の頭上を襲う。

清九郎も跳躍した。反りのない刀に月光を照り返しつつ、隼蔵を迎え撃とうというのだ。そして、二筋の閃光が交差した。

地に降りた清九郎は、背を寒くしていた。左肩から右脇腹にかけて装束が大きく斬り破られ、鎖帷子が露出した。鎖の幾つかは潰され、薄く血が湧いた。

「流石に甲賀の蒼き隼と呼ばれた男よ」

倒壊した櫓の剥き出しの梁に止まる蒼き隼を、清九郎は見上げた。隼は、清九郎を鋭い目で見下ろす。

「隻腕にして、その凄みか」

清九郎は笑った。何故か心が躍った。やはりこの男はこれほどの忍びになったのか、と。

清九郎は窮地にいた。動揺を押さえ込んだつもりではいたが、やはりどこか体軀の動きが滑らかでない。しかも準備不足である。今宵、蒼き隼を狩る用意はしていない。

清九郎、矜持を持たぬ男ではない。が、退くことを知る男でもある。不利を悟れば、背を見せることに戸惑わぬ。

清九郎は慎重に、隼蔵との距離を広げた。隼蔵の跳躍の範囲外に至ると、そこにもう一人の侵入者がいた。勝永が予告したとおり、京橋口からの侵入者は二人である。

「姫御」

と清九郎が呼ぶ人物は、黒髪を掻き上げた頂の白い女であった。

清九郎の無表情で存在感のない装束とは対極に、姫御は紅地の鮮やかな桃山小袖に襷たすきを巻いて、細身の長刀を凜々しく肩に担いでいた。「どうしたの。まさか臆したなんて言わないでよ」

勝ち気な声で、姫御は清九郎に流し目を向けた。艶やかさはまだないが、綺麗な瞳である。

「ところが臆したのでござる」

悪びれもせず、清九郎は言った。姫御は小ぶりの鼻で嗤った。

「あらそう。それで、どうするの」

「退散致す」

「あきらめがいいわね。望み事が叶わないわよ」

「まずは命あってこそ」

「あの片腕の男がそれ程とは思えないけど」

「姫御とは、踏んで来た場数が違い申す」

「私には分からないといたい。まあいいわ。早くお逃げなさいな」

姫御は左手をぞんざいにひらひらさせて、視界から清九郎を追い出した。担いだ長刀を一闪して、

「さあ下郎共、素っ首叩き落とされたいのなら、見参なさい」

と、勇ましく言い放った。その姿は高山の岩山に突然咲いた気高い蘭であった。その蘭を、隼蔵は無表情に見下ろした。さらに視線を下げると、倒壊した櫓のたもとに、神楽の姿が見えた。

「追いませぬのか」

と、神楽は尋ねた。因縁深げな男を、このまま見逃すのかと問うのである。隼蔵は、遠くの夜闇を見た。既に清九郎の姿はない。が、殺気の残映は見えた。

清九郎はただ道を歩くだけの男ではない。つねに退路を確保し、そこには追っ手を襲う術を丁寧に住込む男である。

「追わぬ。あの男は、追えば危険な男よ」

隼蔵は焦らない。清九郎は再び必ず現れる。隼蔵を討つ絶対の自信を持つて。その時こそ、五臓を灼く炎で清九郎を焼き尽くすのだ。隼蔵は音もなく、神楽の側に降りた。

「俺は周囲を探る。あの男がいつまた忍び入るか知れぬゆえ。あの姫御、任せてよいかな」

隼蔵が尋ねると、神楽はあどけない笑みで、あい、と答えた。

神楽は唐突に動いた。跳躍したわけではなく、疾走してきたわけでもない。空間が間引かれたようである。姫御にはそう見えて、少なからず面食らった。

人形かとも疑うほどに気配を感じなかったが、こうして一投足の距離に迫ると、生きていられるらしいことがわかる。

「良くできた絡繰人形なこと。壊すのが勿体ないわ」

一瞬の驚きを素早く鎮めて、姫御は威高丈にあざ笑った。相変わらずあどけない笑みを浮かべて、神楽は、鉄環のついた細身の鉄杖をしゃんしゃんと鳴らした。

「姫御様、神楽と一緒に踊りましょう」

と、無拍子に、鉄杖の先端で姫御を突いた。鉄杖は槍の穂先の鋭さを有しており、神楽のあどけない笑みには相応しからぬ危なさである。

間髪、長刀の柄で刺突を弾いた姫御は、柳眉を逆立て、綺麗な瞳

を荒々しく剥いて、神楽に叩撃した。鉄杖と長刀が絡んで、甲高い音階が響いた。

姫御と神楽は音楽を奏でた。音を奏で損ねれば命を落とす危険な音楽である。三十余合を打ち合つて、両者は一端距離を置いた。松平勢が残兵を駆逐する音と、城内の建築物に燃え盛る炎の咆哮が、遠くに聞こえた。

姫御は長刀を大上段に構えている。神楽は鉄杖を小さく揺らし、鉄環をしゃらしゃら鳴らしている。両者の頬は寒々しいほどに白く、そこに炎の朱が映えている。

「私には大望がある。祖父も、父もが果たせなかつた大望が」

姫御は静かに、しかし剛く言つた。渾身の一撃を神楽に放つ所存である。命を掛けた楽曲を奏でた同士、自分が何故死ぬのか、その理由を教えてやるのが情けと感じた。

姫御は鼻腔を通じて、城内の殺伐とした空気を体内一杯に取り込んだ。その気を血脈の隅々に行き渡らせつつ、細く長く吐き出した。その時に至り、姫御の瞳が激しくきらめいた。無言で、しかし激しく姫御は踏み込んだ。長刀の刃に、鬨気が漲った。

夜が裂けたかと思えた。土埃が渦巻いた。だが、長刀の刃に血華は咲かず、空しく白々としていた。背後でしゃんと鳴る鉄環の音が、姫御の心臓を凍らせた。

「姫御様。今は貴方様のお命を頂戴致しませぬ。今宵はまだ大望を果たす夜ではありませんせぬゆえ」

抑揚のない声は、却つて冷たい刃のようであつた。姫御が流し目で見る背後の神楽は、あどけない笑みのままである。その笑みの向こうに、鬼の顔が滲んだように見えて、姫御は戦慄した。

姫御は激しく歯を軋ませた。冷えきつた血脈を叱咤して、振り向き様、横殴りに斬つた。そこに神楽の姿は既にない。いや、確かにあの娘と戦つたのか。姫御がそう訝しがるほど、そこには殺気の余韻も残されてはいなかつた。

### 孤影集結（三）

数刃の鉛の玉が、有史以来の戦い方を一変させたとと言えるだろう。悼むべきことながら、人類の戦いの歴史は古く、永い。上古は石器や棍棒を用い、青銅器に替わり、鉄器に移ろった。弓が發明され、戈、矛、槍、劍、刀など、人類は積み重ねた時間の多くを、それらの武具の開発と工夫に費やしてきたことだろう。

それらの武具に共通しているのは、人を殺めるといふ目的と、その使用に十分な鍛練が必要だということだ。

時には玄妙な域に達した者が、精神的に神的高みに達することがあり、使用者が、その本来の目的を忘れて、己を高める道を武具に求めることすらある。

生まれてきた理由と、その用いられ方に齟齬を生じることがあるが、そうであるがゆえに、本来忌避すべき殺し合いに、崇高な一幕が演じられることがある。

世の中の事象が全て善と悪に色分けされるとすれば、言うまでもなく、戦は悪であろう。だが、そこに華やかさを見いだすことができるのは、武人と武人が、互いの精神の高まりのなかで、正々堂々と、鍛え上げた技と名誉をぶつけ合うからではないだろうか。命を散華させて営む行為に、人は美しさを見る生き物なのだろう。

人が磨き上げてきた技、高みに至った精神を、数刃の鉛玉は無残に打ち砕く。何千、何万の戦いの成果と反省により編み出された陣形、戦法を、数刃の鉛玉は無意味に破壊する。

それは天文十二年に伝わった。漂着した南蛮人が伝えたという。一説には、東アジアルートで、より以前に伝わっていたともいう。いずれにしろ、それは無粋に、無遠慮に、華やかなるべき戦場を殺伐とした風景に変えた。

それは鉄砲と名付けられた。鎌倉末期、執権北条一族と御家人の心胆を寒からしめた蒙古の兵が用いた炸裂弾をてつはうという。鉄

砲はてつはうに漢字を当てはめたらしい。てつはうがそれ自体殺傷能力に乏しく、目を眩ませ、耳を驚かせることが目的であるのに対して、鉄砲は人を確実に殺傷した。

鉄砲に習練が無用というわけではない。その技を究めんとすれば、それなりの努力が必要であろう。だが多くは足軽が持ち、長柄や弓と比較して、より安易な操練でより確実に敵兵を殺傷することができた。

剣や槍や弓にいくつもの流派や道があり、時代が数百年下っても鉄砲に流派や道を聞かないのは、刃や矢に宿る魂が、鉛玉にはないと人が知っているからだろう。

魂のないものに傷つけられ、奪われる命ほど、無念を残すものは類いを多くしないだろう。

伝統と名誉を重んじる武人の多くは鉄砲を嫌い、蔑んだことだろう。だが、名よりも実を取る質の支配者はその非精神性に目を瞑り、その有益性をういた。

一度、鉄砲が集中的に戦に投入されるや、その破壊力は人々の耳目を驚かし、その成果はすさまじい早さで四方へ伝播した。流行に敏感で、切り替えの早い民族性も手伝って、鉄砲がこの国の果て果てへと至るのには、半世紀を要さなかった。

鉄砲が主役となった戦場に興味を失した武人がいる一方で、鉄砲一丁で戦場を渡り歩く傭兵も現れた。その傭兵を最も大規模に、かつ強力に組織したのが紀州雑賀党と根来衆である。

霜切然叡しもきりぜんえいは、根来寺の行人きよこうにんである。いわゆる僧兵であり、朝には仏法を讀経しながら、夕には鉄砲を担ぐ男である。

往時、根来寺の寺領は七十二万石とも云われ、一万の僧兵を擁して、近畿に強勢を誇っていた。早くから組織的に鉄砲を装備し、その戦闘力は一大名家を凌駕していた。が、その繁栄も、織田信長と羽柴秀吉の紀州征伐で潰えた。天正十三年のことである。

信長に焼き払われた元龜二年の比叡山延暦寺も同様であるが、宗教が武装すれば、その戒律はしばしば頽廢する。酒を飲み、獣肉を

食らい、女犯にょぼんに至る僧も現れる。根来寺もその悪しき流れに従って、世俗の煩惱に走る僧もいたが、然叡はそうではなかった。彼は真言宗の戒律を堅く守る求道者くどうしゃであり、鉄砲を担ぐのは仏敵を打ち払わんがためである。彼は自らを明王に擬していた。

「オン・ソンバ・ニソンバ・ウン・バザラ・ウン・パッタ」

降三世明王こうさんぜみょうおうの真言を唱えて、然叡は火蓋を起こした。

彼は鉄砲の引き金に指を掛ける時、三面八臂の仏界の守護者の名を唱えるのを常としている。簡単に人を殺める力にした時、人の煩惱を焼き尽くす明王の力を借りねば、彼は狂気に走り兼ねない己を制御する自信がなかった。戦場で幾十人倒す度、彼はそうして正気を保つてきた。

然叡はいつになく緊張していた。戦が巻き起こす血煙あいのに戦いたのでは決してない。戦きを感じなくなるほど、然叡は戦場を渡り歩いてきた。

何度目かも知れぬ然叡の戦場は、今宵、落城寸前の大坂城玉造口であった。味方である松平勢の兵が狼狽えている。その狼狽えが、然叡のなかにもある。

照準を合わせるため、銃身に設けられた三つの目当めあてが重なる向こうに、狙うべき者が見えない。松平兵の持つ松明が火の粉を散らす。その外は、塗り込めたような闇の黒である。

しかし、すでに数名が斃れた。撃たれたのである。城方に鉄砲を持った兵がいることは明らかであった。破裂音がし、また一人、胸から鮮血を撒き散らした足軽がもんどり打った。

驚くべきはその射撃速度である。火縄銃は、発射するまでの作業が忙しい。熟練者であっても、二十秒は必要とする。だが、先に倒れた兵と今倒れた兵との間には、時は十秒となかった。

複数の城方兵が隠れている可能性もあるが、気配を全く感じない。敵の目の白黒が分かる距離が、銃を撃つ距離という。その距離は決して近くはないが、夜とはいえ、松明の明かりもある中で、気配を全く感じぬ遠さではない。そうであるはずなのに、然叡の鉄砲の目

当には、夜しか映らない。

火縄銃は、当然のごとく火縄を用いる。夜間には、その火縄の明かりが、鉄砲を備えた兵の居場所を敵味方に教えることになる。が、月のない皇月の夜の一匹の螢ほどの明かりも見えぬ。それが松平兵を狼狽えさせ、然叡を緊張させた。

また一人斃れた。十秒と経っていない。部隊を率いる頭立つ侍は、一旦退却することにしたらしい。九分九厘の勝ち戦である。冥府から飛んでくるような鉛弾に命を砕かれては堪らぬのだろう。

松明の夜闇を払う明かりが右から左へ小さくなって、やがて消えた。目当の向こうの夜が、一段と濃く迫ってきた。

松平兵は退却したが、然叡は退がらない。彼は、松平忠直麾下の鉄砲兵ではない。あくまで彼は傭兵であり、主の為に働く男ではない。廃れた根来寺の再建。然叡が大坂城で鉄砲を構える理由は、それである。

（撃ってみるか）

と、引き金の指に込めかけた力を、またふつと抜いた。深く吸い込んだ息を、ゆっくりと吐いた。

（焦ってはなるまい）

然叡は自らを戒めた。敵の狙撃手が草むらや物陰に潜んだ場合、あらゆる方向を撃つことで敵の反応を誘い、その居場所を特定した経験が、然叡にはある。しかし、松平兵の持つ松明がなくなつたいま、視界は闇でしかなく、板はいを含んだ馬であれば、その一群が横切つたとしても気付かぬだろう。不用意な発砲は、逆にこちらの位置を教えることになる。

然叡は考える。敵の狙撃手が考えることを。敵は十発余りを放ち、数名の松平兵を斃したが、じつは然叡、この玉造口に来て、一発も放っていない。崩れた石垣の大石の陰で、じつと息を殺している。

松平兵は全て退却したと、敵の狙撃手が油断している可能性はある。

（近づいてみるか）

然叡は、大石の陰からにじり出た。石垣沿いを、守宮やまみやのように這

った。

ところで、然叡の鉄砲にはいくつかの工夫があった。彼は根来寺の僧兵であったが、自国産の紀州筒は用いず、近江の国友筒を愛用した。紀州筒と比べて銃身が細長く、命中精度が良かった。

一般的に、戦国期の日本に伝わった火縄銃はマツチロツク式であり、瞬発式火縄銃である。この式の火縄銃は、引き金を引くと同時に弾が発射されるため、狙撃に向く。反面、迂闊に引き金に触れると発射してしまうため、移動時等は火縄を外して持ちあるく必要があった。然叡はそこを工夫し、欧州や中国大陆に普及した緩発式に近い火縄銃を作り出していた。これは、引き金を引いてからゆつくりと火縄が火皿に近づき、引き金から指を離せば火縄が元に戻るのである。これであれば、移動中も火縄を装着したままとできる。

また、夜間、火縄の明かりで敵に位置を知らしめてしまうのが火縄銃の一般的な弱点であったが、緩発式とすることで火縄を銃身に装着したままとでき、その火縄と火皿を隠すような覆いを取り付ければ、夜間でも火縄の明かりが漏れない。

緩発式火縄銃の欠点は、引き金を引いてから発射されるまでに時間差があり、狙撃には向いていないことであるが、それを補う技量が然叡にはあった。

そういうわけで、夜間の活動時には、然叡はこの工夫を凝らした鉄砲を用いていた。然叡は敵の狙撃手の位置を掴んでいないが、敵の狙撃手もまた、然叡の存在を知らぬであろう。

然叡は匍匐しつつ進んで行く。地を這う生き物と同じ目線で、彼は敵の狙撃手を探した。松平兵の松明の明かりに慣らされ、夜間に視覚を惑わされていた目も、ようやく夜陰に潜む物象の輪郭を掴めるまでに回復していた。そういうえば、月明かりもある。

然叡の匍匐は続く。右手は内堀である。城方が寄せ手かは知れぬが、幾つもの骸が無言で浮いていた。

堀をひとつ越えれば山里郭の縄張りに入るというところで、崩された白壁に穿たれた銃眼に潜む人影を、然叡はついに見つけた。一

人のようであったが、油断はならぬ。あの人影は凄腕である。松平兵を瞬く間に駆逐した。

然叡は用心に用心を重ね、狙撃し易いよう、人影の側面へ回り込んだ。幸い、人影の側面を守るべき城壁は崩れている。

人影の真側面に至って、然叡は深く息をした。鼻息で草一本揺るがさずに息を殺していた然叡である。胸底まで吸い込んだ空気は美味かった。火縄の匂いが混じった。

石垣から転げ落ちたと思しき大石の陰から、然叡は銃身をすうと出した。目当を銃眼の人影へ据え、照準を定める。密かに然叡は笑った。思ったように敵の狙撃手は寄せ手がすべて退いたと思い込んでいるらしく、火縄を灯していなかった。

ゆっくりと、絞るように引き金を引く。火縄がゆっくりと動き出す。火皿に盛った口薬に火が付き、胴薬に伝わって激しい燃焼が起き、爆発と供に鉛弾を吐き出す。だが、然叡の鉄砲が一連の動作を終えるよりも早く、彼の殺気が先走ってしまったらしい。自らの気配を隠しきれなかった点、然叡は迂闊であった。

銃眼の人影は、自分を狙う気配に気付いた。さつとこちらを向くのが見えた。夜行獣のような目のきらめきが見えた。轟つ、と然叡の鉄砲が柑子かんじから火を吹いた。人影は寸前に身を逸らし、鉛弾は夜だけを貫いて、その向こうの何かに衝突して小さな火花を散らした。外れた。しかし、然叡は慌てなかった。敵は火縄を灯していない。いまから火をつけたとして、どれだけ彼の動作が早くとも、次弾の装填が然叡より早いとは考えられぬ。

然叡のその余裕は、瞬く間に蹴飛ばされた。敵はすつと銃を構えた。火縄を灯さずに。そして彼の鉄砲が咆哮した。鋭く空気を裂く音がして、然叡の頬すぐ横の大石を削り、火花を散らした。敵も少なからず驚いていたようで、そのことが敵の弾道を逸らした。

然叡は石陰から飛び出して、駆けた。無論、逃げたのである。狙撃を確実とするよう近づき過ぎていた。早く身を隠さねばならない。敵は十秒もせぬうちに次弾を撃ってくる。然叡は横倒しとなった大

木の向こうへ飛び込んだ。その瞬間、敵の次弾が木片を激しく舞い散らした。

敵の狙撃は、おそろしい距離を貫いて襲ってくる。もっと遠くへ逃げねばなるまいが、そうすれば、然叡の弾が届かぬ。然叡、この戦いから逃げる気はない。

激しく息をしながら、然叡は腹に巻いた革帯から早合を取り出した。早合の栓を口で抜き、袖子から火薬と弾を銃身にほり込んだ。そこまでの鉄砲を胸元に引き付け、然叡は息を整えようとした。このまま撃つたとしても、乱れた息では、命中は覚束無い。

棍棒の殴撃を受けたように、どんと大木が揺れた。敵の三発目が大木を穿つたらしい。然叡は腰に回した動乱どうらんから口薬入れを取り出し、注ぎ口を火皿に傾け、口薬を盛った。手を放すと、口薬入れは腰に提がった。

然叡は深呼吸を一つした。胸の鼓動はまだ騒がしかったが、照準を妨げるほどではなかった。然叡は、銃身を横倒しの大木の幹に置いた。銃身に設けられた三つの目当てを重ね、その向こうに狙撃すべき者の人影を用心深く探したが、何も見つからなかった。

敵の狙撃手は三発目を放ったあと、撤退したらしい。然叡は銃身を大木の幹に置いたまま、ごろりと仰向けに寝転がった。

然叡が感じているのは安堵である。あのまま撃ち合っておれば、確実に然叡が追い込まれていたであろう。

敵は火縄を灯していなかったはずである。それでいて、続けざまに三発放った。或いは、敵は然叡と同様の工夫を自分の鉄砲に施していたのかも知れぬ。しかし、然叡の工夫と同じであれば、火縄の明かりは隠せたとしても、連射は困難なはずである。

或いは、あの工夫を、敵は見いだしたのかも知れぬ。然叡が長年追い求め、いまだ糸口すら掴んでいないあの工夫を。

火縄を用いずして撃てるなら、鉄砲の運用性と速射性は格段に増すであろう。が、火薬を爆発させねば、弾は飛ばぬ。この二律背反の克服が然叡の長年の研究課題であった。敵はその方法を見いだし

たのやも知れぬ。

いくぶん静かになった呼吸の音を聞きながら、然叡は月を見上げた。月は全てを見ていたはずである。然叡は月に問うてみた。然叡になく、敵にある妙法の正体を。

しかし月は白々として、無言であった。

## 孤影集結（四）

生玉口を西から守る三の丸は、既に寄手の草鞋と馬蹄に蹂躪され尽くしている。生玉口の門は燃え尽きたとみえて、破壊の余火にくすぶる黒焦げた木材が、弱々しい白煙を月へ昇らせていた。

二の丸に絢爛な薨を連ねた豊臣一族の屋敷は、赤々と燃えている。短い栄華を薪とすれば、炎は激しく踊るものとみえて、舞う火の粉の華やかさは、さすが天下人の残影を焼く炎である。

往時、きらめくばかり豊臣の騎馬武者を並べたであろう桜の馬場に嘶く馬影は、全て徳川の騎馬である。堅牢な二重櫓門として、仏法を鎮護する仁王のごとく屹立していた大手の桜門も、今は口を虚しく開けて、寄手の旌旗の行き交うがままと成り果てた。

城に不落の城はなし。有史以来数千回繰り返された戦いの歴史に記された殺伐たる経験則が、虚しいこだまとなって十河一虎の胸中に去来した。

一虎は荒ぶる虎影である。血と破壊と炎の熱気に酔いしれながら、本丸御殿の残兵狩りに勤しんでいた松平忠直の兵が、一虎の姿にぎよっとした。

二の丸から本丸に来る以上、総毛を逆立てた虎のような男が豊臣の兵であることはなかるうが、かと言って味方と安堵できる程度に、男の発する殺気は軽くない。

大手門をのそりと潜った一虎に、門を固めていた松平兵が、観音開きを開くように押しつけられた。一虎が肩に担いでいた剛槍の石突を地にどんと降ろすと、兵の開きがさらに広がった。

残兵狩りにも参加できぬ弱兵ばかりかと、一虎は蔑みかけて止めた。旗指物を背に負わぬ兵が三人、前に出ている。というより、その他の松平兵がその三人よりも後ろに退っただけのことである。どちらにしる、その三影には、一虎の殺気を正面にして足を退げる意志はないようであった。

一虎は凄味のある眼で笑った。黒き陽炎の影が話していたが、一虎等六人の侵入を阻む者共こそ彼らであるう。松平兵に混じって、一虎を待ち構えていたらしい。

大坂方の兵が混じっていると露見すれば当然、寄ってたかつての膽切りと相果てよう。その危険を冒してなお平然と立つ三影は、剛の者であるに違いない。その剛者が三人で一虎一人を止め、罷り越した事実、一虎は満足した。石突を地に置いた剛槍を軽々頭上に一旋すると、右脇に槍を抱え、左手を大きく広げて、ござんなれと身構えた。

三影は、互いに視線を交わし合った。

「さて、誰から行く」

中央の武者が左右を見た。

「僧たる者、慎む心が肝要ゆえ、先手は譲るといたそう」

左手の者が惚けた。

「争い事は好まぬゆえ」

ではなぜここにいるのか分からぬ右手の者が、ころころと喉を鳴らした。

「では私から挑むしかあるまい」

左右に呆れた息を吐きつつ、中央の武者が一步進んだ。

その武者を。轟然と一虎の槍が突いた。鉄盾も紙細工のように貫く穂先である。ごんつと巖に巨岩が撥ねる音がして、一虎の槍が弾かれた。両手から両肩にまで痺れが駆け抜けた。衝撃は凄まじかったものとみえて、一步進んだ武者の甲を弾き飛ばしていた。

黒髪が踊った。乱れた黒髪の一糸を赤い唇に含んだ姿は、明らかに女であった。その女が、槍を伝って、するすると一虎の間合いに入り込んだ。突き出された女の細腕に、短い錫杖があった。

女が低く念を込めると、錫杖から生じた眼に見えぬ念動波が激しい衝撃となつて、一虎の間合いで炸裂した。一虎の肢体の強靱さを持つてせねば、その衝撃は耐えられなかつただろう。一虎ですら、不意を突かれた一撃に、危うく卒倒しそうであった。

一虎は数歩退いた。突き飛ばされたというほうが近い。ここ十数年、戦いにおいて退いた記憶が一虎にはない。退かされる苦みを久方ぶりに思い起こしたのが、女の細腕であるという事実、一虎は驚愕しつつも歓迎した。

一虎の刺突を弾いた衝撃と、一虎を突き飛ばした衝撃は同じであろう。女が念を込める際に発する短い言葉の調子に一虎は心当たりがある。

「なるほど、修験の者か」

一虎は両肩を大きく回して、痺れを振り払った。おもしろい、と一虎は眼を剥いて笑った。

「『巖衝』を正面から食らうて笑いおるか。さてさてわしらの手に負える御仁かのう。ほれ、雀水殿、退がっておりなされ。二度も撃てば、念は空っぽであるう」

女に先手を譲った男が、のそりと一虎との間合いに割って入った。女は雀水というらしい。巖衝は相当な念の練りを必要とするように、しばらく雀水はあの衝撃弾を放てない。

割って入った男は、さりげなく自らを僧と言っていたが、なるほど、黒の僧衣を荒縄で腰に縛っている。同じような荒縄で両肩に襷をかけており、鬼が持つような六角棒を杖ついている。一見、真つ当な僧侶とは見えない。

「拙僧は楽坊と申す。さる寺では泰輪房と呼ばれておったが、いささか肩凝りする名乗りでな。こつちが雀水と申して、まあお見込みどおりの修験者よ。あつちのひよろりとしたのが、今出川清平公いまでがわきよひらじや。きよひらかひらひらか分からぬ浮かれた御仁じゃが、まあ琵琶を使わせたらかなかなか佳く弾く」

頼みもせぬのに、楽坊は三人の素性を明かした。遮りもせず聞いていた一虎も酔狂だが、それよりも一虎は楽坊の体躯の巨きさに軽く驚いた。間合いの外に居た時は気づかなかつたが、間合いに入り込んだ楽坊は、頭一つ分見上げる魁偉さであった。

「山女と破戒僧と貧乏公卿がお相手かね」

一虎の鼻が冷たく笑った。

「まずは山女がお相手したゆえ、次はこの生臭坊主がお相手しよう」  
「では、その次はあの長ひょうたんの貧乏公卿か」

一虎は若干気の毒げに清平を見た。長身だが細く、下膨れの公家顔は、ひょうたんそのままであった。とても一虎の剛槍と武を争う人物とは思えない。

「長ひょうたんでも貧乏公家でもあれへん。権少将（ごんしょうしょう）のしょうしょう」と呼びなはれ」

ぱつ、と開いたのは青地の扇子である。今出川清平、一虎の虎眼を向けられてもたじろがぬのは、一見に反する肝の太さを秘しているのかも知れない。

「その剛槍には拙僧の六角棒が相応しかろう。どれ、まずは一振り馳走いたそうか」

楽坊の足元から風が巻いた。杖付いた六角棒を振り上げて、一虎の頭頂辺りを狙い撃った。大地を大槌で撃つような音がして、一虎の剛槍と楽坊の六角棒が猛烈に叩き合った。忽ち、十数合打った。

（強いな）

と、一虎は感じた。戦場往来二十余年、一虎と十合以上槍を合わせた武士（ものぶ）はあまりない。

（が、脆い）

一虎が猛然と突き入ると、楽坊は守勢となった。打ち合いは簪力で行えるが、鋭い刺突をさばくには技量がいる。楽坊は確かに強いが、その強さは戦場で研磨されてはいない。一虎の戦場の槍に、楽坊は忽ち追い立てられた。楽坊に怯みが生じたその時に。

琵琶が鳴った。鳴らしたのは、長ひょうたんこと清平である。彼の左手の撥（ばち）が、弦の上で踊った。途端に楽坊の怯みが霧散し、彼は勇ましく前に出た。一虎の理解の外にあることながら、清平の琵琶には、その者のために弾く音色に、聞く者を奮い立たせる妙がある。敢然と楽坊が打ち込んでくる。それを頭上に受けた一虎は、槍の刃を横殴りに楽坊を両断してくれようとしたが、楽坊の突進に間合い

は潰され、穂先は十分な勢いを得る前に楽坊の左肩に阻まれた。肉は斬ったが、骨には至っていない。

それでも一虎は臂力のすばらしい人である。総髪を逆立て、怒気を奥歯でかみ殺しつつ、楽坊の巨躯を押し飛ばした。間髪を入れず、一虎の槍の穂先が、楽坊に襲いかかった。

一虎の槍より疾く虚空を貫いて飛来したものが、一虎の具足の右上腕部を切り裂いた。具足の下身の身が薄く切れたが、その程度は無論かすり傷にもなりえない。

一虎は虎眼を楽坊からずらした。そこに、修験者の雀水がいた。構えた錫杖から、蔵王権現ざおうこんげんの妙力を得た術法を投じてきたものとみえる。その間に、楽坊も態勢を整えた。

戦いはいよいよ佳境である。清平の琵琶もますます奮った。琵琶の音色に鼓舞された楽坊が、六角棒に旋毛を巻いて打ちかかってくる。雀水の投じる鋭利な術法を避けつつ、楽坊の六角棒をさばくのは、一虎にとつても危険な作業であった。

ところで、四人が鋭鋒を熾烈に交える舞台は大手桜門である。周囲には松平の武者がひしめいている。彼らは突然始まった一人対三人の戦いに、当初驚き、その後に見入った。ここは残兵狩りの生臭さから少し遠いところにある。兵たちは、夜天を脅かす火炎に高揚していたが、血臭に酔ってはいなかった。

見るところ、三人は松平兵のようである。その三人に槍を向ける男はこの手勢かは知れぬ。思うに、松平兵の三人と因縁のあるどこぞの侍であろう。兵卒とは思えず、名のある侍大将かと思えた。

ともかく、桜門を占拠した松平兵は不意に沸き起こった戦いに不審を覚え、集団戦法に慣れた彼らは、能でも鑑賞するかのような雅さで、源平や太平記の時代が溯って現出したような武人同士の戦いを、雑笑交じりに見学した。

それにしても、三人を敵に回す男の槍さばきは、見る者を惚れ惚れさせる。その槍さばきの凄まじさを思えば、彼を三人で囲む者等に、さして卑怯を覚えない。

舞台に人影が一つ増えた。火炎に照り映える桜門の向こうの深い闇から現れた人物は、松平の将兵ではない。

「手間取っているようね」

闇間に華が咲いたかと思紛う紅地の鮮やかな桃山小袖が現れた。

美しい華には刺があるのが道理のようで、桃山小袖は、細身の長刀を伴っている。

「姫御、か」

一虎は脇に咲いた華をちらと見た。

「そちらの首尾はいかがであつた」

姫御は西の京橋口に赴いたはずである。それがここに現れたのは、京橋口を破れなかつたからか。同伴したはずの伊賀者が見えぬのは、斃れたからか。姫御の項の白さは凜として、敗者が負う鬘やっれの色はない。

「どうもこうも」

捨てるように姫御は言った。どうもこうもない。連れの伊賀者は敵前逃亡し、相手の甲賀者も雲隠れ、微笑んだまま人を斬ろうとする得体の知れぬ少女は、背の凍る笑顔を残して霧散した。結果として、姫御は京橋口を抜けたが、悶々とする気を晴らす場所を求めてこちらに流れてきたというわけである。

「手出しは無用ぞ」

姫御を見る一虎の横目が凄んだ。

「でも、埒があかぬように見えてよ」

それは飛び込みながらの台詞であつた。飛び込まれたのは清平である。琵琶を奏するだけではあつたが、時折狙われた一虎の槍を俊敏に躲かわしていた清平にとって、不意を突かれた以上の反応の鈍さであつた。

楽坊が突き飛ばさなければ、清平は姫御の長刀に開きにされていたことだろつ。辛うじて、開かれたのは琵琶の弦だけで済んだ。

「余計なことをする」

舌を鳴らした一虎は、琵琶の音が止んだと同時に、彼にのしかか

つていた得体の知れぬ重さから解き放たれたことを知った。

一虎と同時に舌を鳴らしていたのは楽坊と雀水である。味方を鼓舞し、敵を疲労させる清平の琵琶の音がなくば、あの狂虎のごとき一虎に当たるのは、無謀と思われた。

楽坊と雀水は、ここが引き時と悟り、背後に大きく跳躍した。楽坊は、清平の襟首を掴んでいる。

疲労の重鎖から放たれた一虎が吼えながら突進する。その突進を妨げたのは、意外にも松平兵であった。元より、その現象は楽坊等の計算にあつたに違いない。

戦いを見物していた松平兵共は、美しい女形が登場して、いよいよ佳境かと手に汗握ったところで、彼等の直上である侍大将の雷を落とされた。

「たわけめら！あの者共、ひっ捕らえんか」

侍大将の怒号には、遅れる者には腹切り打ち首を命ずることも辞さぬ危うさがあつたから、兵共は刀槍の鞘を払って、数十人、一虎等五人へ向けて一斉に群がった。

一虎の槍の照準に捉えられていた楽坊等の姿が、松平兵の具足に埋め消された。楽坊、雀水、清平の三人は、向かつてくる刀槍を巧みにさばきつつ、松平兵に粉飾した姿をくらませた。

三人を追おうと思えば追えた松平兵を蹴散らしたのは一虎である。彼の槍の一振りで、数人の兵が夜天を逆さに見た。一虎も大局で見れば寄手の一人であるから、さすがに松平兵を殺すわけにはいかない。とはいっても、一虎が発する殺気だけで、松平兵は十分に震え上がった。

「我ら織田侍従が配下の者。密命あつて押し通る」

姫御が高らかな威声が、一虎の殺気に脅える松平兵を打ちすえた。二人が一步進めば、兵の囲みは二歩退った。数歩進めば、兵の囲みは完全に解かれたが、当然のようにあの三人の姿はない。

一虎は深く息を吐いた。殺気はまだ消していない。

「逃げたな」

腹の収まりのつかぬ顔をして、一虎は槍を肩に担いだ。

「奴らが逃げようと、我らの為すことに変わりはあるまい」

姫御は、言い捨てた言葉を追い越すように、武者の槍が林立する中を進んだ。

「ふうむ。さもあらんか」

気分を改めた一虎は、殺気をいささかも滅殺せぬまま、姫御の影に続いた。残された松平兵共は、嵐の猛威を見送ったような顔で、二の丸豊臣屋敷を焼く炎が爆ぜるのを聞いた。

## 孤影集結（五）

石見重敵いわみじゅうけんの緊迫は続いている。抜き身の刀身が月に白々冴えている。

重敵は神仏蔵王を懼おそれぬ男である。悪鬼羅刹を前にして狼狽うづたえぬ男である。その傲岸な男が、眼に見えぬ冷たい糸に縛られて、微動だにできぬ。汗だけが熱い。

重敵のいる山里廓には、異界の重い幕が下りていた。見えず、触れることはできないが、外界とは確実に隔絶された。そう確信させる異質な空気が、山里廓には充満している。

重敵、かろうじて眼まなこを動かし、視界に女がいることを確かめた。その女は天戸朝霧あまとのあさぎりと名乗っており、敵である。敵であるが、重敵の影走りによって手傷を負っているはずであり、重敵にとっての脅威ではない。それどころか、敵であるはずにもかかわらず、この場において、確実に人と確信できる朝霧には、むしろ重敵と同じ世界に居る存在としての安堵感すら感じられた。

重敵の眼はなおも動く。そして、月の黄光の中に蠢く黒い陽炎を見た。その陽炎こそが、重敵にかつて経験のない緊迫を強い、山里廓を外界から隔絶している源である。

「石見重敵、相見あいまみえたいと存じておった」

陽炎の声は低い、幾重にも重なっているように聞こえる。一人の声とも思えるし、複数の声とも思える。

「拙者は生涯無縁でありたかった」

と返したいところだったが、重敵、上唇を嘗めただけだった。

「我が式神おにを一刀で屠るその腕、この方の陣営に欲しかったが、とかくこの世はままならぬもの」

陽炎は笑つたらしい。毒蛇の合唱のような、悪寒を掻き立てる起こす声でした。

「どうだ。今からでも遅くはない。お主のその刀の切っ先、我とは

反対に向けてみぬか」

妙な色気が、陽炎の声にはある。ついうっかり頷いてしまいそうな魅惑がある。妖魔の色気というものだろう。

「あいにくだが、そこで怖い眼をしてこちらを睨んでおる女が、拙者を歓迎すまいよ」

重蔵は妖魔の誘いを辛うじていなした。

「ふふ、天戸朝霧のことかな。心配せずともよい。堂々の立ち会いで負った傷を恨むような輩は、我が陣営にはおらぬ。あの眼は生来のものよ。怖いともみえるが、色があるとも言える」

「近頃、色の強い女に惑わされておるところ。ところで、拙者を誘うのであれば、まずこの重苦しい気をとっぱらってもらいたい」

重蔵の要請を気に入ったらしく、陽炎は愉快げに笑った。もつとも、陽炎にとつて愉快であつても、それを聞く者の耳には悍ましい。「そうはいかぬ。鉄鎖功を解けば、その刃はこの首を刎ねるつもりであろう」

陽炎は、自分の首の辺をとんと叩いた。重蔵は口元を冷たく歪ませた。それこそ鬼神を脅かす笑みであろう。

「その強かさ。その度胸。いちいち惜しい男である。再び問おう。我が陣営に与力せぬか」

重蔵への執着があるらしい。確かに、そうこつ買える男ではない。だが重蔵、しつこいのは嫌いである。そつぽを向いて、唾を吐いた。「我に与力すれば、事が成つた暁には、望のものが手にはいるぞ」

陽炎の声の妖魔が増した。

「一度無くし、もはや手に入れられぬと嘆いたものも、再びその手に戻ろうぞ」

陽炎の囁きが視覚には捉えられぬ蠢く触手となつて伸び、重蔵の両のこめかみをわし掴んだ。無論、知覚としてその触手を感じはしなかったが、何かの抗えぬ念が意識域に黒く広がるのを、重蔵は感じた。

重蔵の脳が、かつて失つたものの姿を映じた。それは失つて以来、

重蔵を糸の切れた凧とした、かけがえのない重蔵自身の魂ともいえるものの姿である。その姿は眩しく笑っている。陽炎はいう。それをその手に取り戻せると。

重蔵の脳幹に発した激しい衝撃が、背骨を鋭く貫いた。青ざめていた重蔵の容色が見る間に燃えるような赤となり、眉と髪が逆立った。

「物でも捨つかのようによく言うてくれる」

全身から発せられた剣気の急激な膨張が、重蔵の四肢を押さえ付けていた目に見えぬ鉄鎖をちぎり飛ばした。火炎の柱が天を衝くかのような剣気が立ち昇った。いや、それは怒りであつたらう。

「それほどまでのものを失つておつたか」

陽炎が発した嘲りとも聞こえる空気の微動を、噴出する重蔵の怒気が吹き飛ばす。

轟然と風が乱れて、真つ向から斬り下げた重蔵の剣が、陽炎を真っ二つにした。叩き潰され、消し飛んだ。しかし手応えは、勢い余つて斬り落とした古木の枝の感触のみであつた。

重蔵は体内に煮え立った熱い気を、太く長く吐き出した。白い蒸気が、しばし重蔵の姿を隠した。蒸気が薄まり、再び月光の下に現れた重蔵は、仏殿に安座する塑像のように朝霧には見えた。その朝霧の視線に気づいたのか、

「失つたものは戻らぬもの。自ら打ち捨てたものならばなおさらのこと。それでもこの手に戻つたならば、それは魔以外のものではない」

朝霧に語つたのか、自身に聞かせたのか、重蔵は愛刀を一払いし、鞘に収め、音高く鯉口を鳴らした。

朝霧の存在を黙殺するかのように、月光の届かぬ夜闇に消えた重蔵の残影を見ながら、朝霧は言った。

「逆鱗に触れたみたいね。あの男の与力は望めないわ」

朝霧の背後に、黒い陽炎が揺れている。

「ふふ、そうではない。我言霊は蟲となつて心の深奥に棲みつく。」

やがて臓腑を食い尽くし、脳髄に至るであろう」

「その蟲は私にも棲みついているのね」

「ふふ、さあな」

蛇の舌なめずりに似た声を残して、陽炎は消え去った。悍ましい悪寒が、朝霧の背に残った。

朝霧は左の脇腹を触った。そこに激しい痛みがある。重敵の影走により、肋骨を折られたようだ。

これからこの山里廓で開始されるであろう激しい戦いに、この傷を負っては参戦できない。しかし、朝霧はこの場を離れるつもりはない。あの男、石見重敵の戦いを見届けたかった。

(あの男ならばもしや)

黒き陽炎の蟲すら焼き尽くす強さを秘めているのではないか。そんな予感が、朝霧にはある。もしその予感が正しければ、重敵こそ朝霧の求める男である。彼のために身も心も捧げねばなるまい。

朝霧は脇腹の痛みを頬を歪めながら、重敵が消えた同じ夜闇の中へ向かっていった。

黒き陽炎を仕留めた感覚は重敵にはなかったが、ともかくも、山里廓を外界から途絶させていた妖気は消え去った。代わりに南から押し寄せてきたのは、熱い闘気だ。その圧力はすさまじく、山里廓を押し流さんばかりである。

重敵は心地良さげな笑みを浮かべた。黒き陽炎の妖気には鬱屈とさせられたが、この闘気は清々しい。いずれの発出者も危険には変わりなからうが、戦うならこの闘気の持ち主がよい。

重敵は廓内を駆けていた。そう広い廓でもないが、闘気の持ち主は闇夜の篝火よりも、その存在がはっきりと分かる。

一方、十河一虎も雀躍さくさくしていた。この剣気。我が槍を交えるに相応しき敵に出会ったと、一虎は喜んだ。

重敵は駆けながら二尺八寸の愛刀を引き抜いた。一虎は咆哮して、剛槍を頭上で旋回させた。

かつ、と火花が散って、刃と刃が激しく打ち合った。重敵と一虎

は物も言わずに、忽ち十数合打ち合った。互いに名乗りを上げなかつたが、必要なかつた。互いに強敵と認め合い、それで十分であつた。

風を巻く一虎の剛槍。劍風を起こす重敵の劍。互いに一步も退かず、さらに十数合を打ち合った。両者の間合いに灼ける火球が生じたかのように、渦巻く風は熱かつた。

大地を割らんばかりに踏み込んで、渾身に一突きをみまう一虎。その槍の穂先を、愛刀の鎬しのを灼き焦がしながら左手に逃し、果敢に踏み込んで真つ向から斬り下げる重敵。その斬撃は、しかし一虎の槍の柄に噛み付いた。

鉄の焦げる匂いを漂わして、重敵と一虎は数寸の距離に、互いの目を見た。

力量は互角と見えたが、膂力は一虎が勝つた。彼は槍の柄に重敵の劍を噛み付かせたまま、有無を言わず十数歩押し込み、膂力に任せて重敵を突き飛ばした。一丈ほども宙に浮いたであろう重敵めがけて、一虎の槍が必殺の勢いで伸びた。

一虎が膂力で勝るとすれば、重敵は技で勝つた。突かれた勢いに逆らわず、宙で体を一回転させ、鉄を巻いた鞘で襲い来る槍の穂先を押さえるや、全体重をかけて槍を地面に叩き落とした。着地すると同時に、重敵は胴払いに一虎の左脇を襲つて、駆け抜けた。重敵を追うようにして、細い血の筋が走つた。

一虎は激しく舌を鳴らした。具足の左脇の隙間を薄く裂かれただけで、痛手ではない。一虎は百獣が恐れるであろう眼を裂かんばかりに見開いた。

剛槍をりゅうりゅうと扱きつつ、一虎は次の攻防の時を待った。一虎の虎眼に写る重敵は、ゆつたりとした動作で、劍の切っ先を正眼に置いた。

一虎の鬪気と重敵の剣気が交差する一点で、熱い火球が燃え盛つた。その火球を貫いて。

眼に見えぬ闇から章駄天よりも速く飛来する殺気に、一虎は辛う

じて身を躲した。背後の岩に火花を散らして跳ねたのは、鉛弾である。

一虎は大きく跳んだ。その影を追うように、二発の鉛弾が地を穿って、土埃を舞上げた。

一虎の虎眼より凄まじい怒気を放ったのは、重蔵の眼である。その眼を向けられた者は、銃身が熱く灼かれた鉄砲を立ち撃ちで構えている。構えた鉄砲が細枝に見える筋骨をした容姿だが、実は女である。名は照てるという。彼女の持つ鉄砲は、この時代の常識を軽く越えている。

「考え違いすなよ。ここはお主の趣向を満足させる場ではない。侵入者を打ち払うのが我らの役目のはず」

照は、重蔵の眼を、そう叱咤した。男言葉だが、容色は悪くない。重蔵は舌を鳴らした。道理は照にある。

納得できないのは一虎である。真つ当な武と武の競合を愉しんでいたところに、無粋な鉄砲の登場である。鼻白むこと甚だしいが、差し当たり、一虎は身を隠す術を求めねばならない。辺りには身を隠す遮蔽物はないのだ。出来得る事と言えば、射程の届かぬ闇に隠れることだが、二の丸から本丸に至る炎が、皮肉にも一虎の抛るべき闇を払っていた。

どんな妖術を用いたのか知れぬが、女の持つ鉄砲は連射が効くらしい。鉛弾を二三発食らって、女を突き伏せることができるかどうかの算段に入った時、乾いた銃声が一虎の背中越しに鳴り響いた。振り返ると、見知った姿があつた。

霜切しもぎり然叡ぜんえい（しもぎりぜんえい）である。彼は、彼の独自の工夫を凝らした緩発式火縄銃を背中に負い、手には馬上筒を握っていた。その馬上筒が火を吹いたのである。威力と射程には劣るが、狭い山里廓では影響は少ない。

一虎は肩越しに然叡を見た。そして、そういえば俺にも仲間がいたか、と笑った。

一虎が笑っている間にも、然叡はすばやく動く。早合で次弾の装

填をし、左右に駆けながら、敵の射撃手との間合いを詰めた。

一度銃火を交わしてから山里廓に至るまでの間に、然叡は考えた。常識から完全に外れた連射速度を持つ銃は、妖銃と呼ぶしかない。しかし、その妖銃にも成せぬことはある。それは、すばやく移動する物体を正確に撃つことである。一所に止まらず、瞬時に移動する物体を撃つのは容易ではない。

一瞬前まで然叡がいた地に、土埃が上がる。照は、然叡が妖銃と呼ぶ鉄砲を立ち構えにし、続けざま、連射した。しかし、然叡の予想どおり、鉛弾は然叡の影しか貫けぬ。やがて、装填していた妖銃の弾が切れた。

照の視界に馬上筒を構えた然叡の姿が映った。彼の唇は何ごとかの真言を唱えていた。

馬上筒が火を吹くには、ただ然叡が右の人差し指を絞るだけでいい。しかし、彼の指がまだ動かぬというのに、火の玉が先に生まれた。

構える馬上筒の銃口やや左に生じた火の玉は、大きさ拳ほどであった。何かと訝るよりも、然叡の本能の方が早かった。彼は咄嗟に後ろへ跳んだ。

火の玉は猛然と炸裂した。熱波が皮膚を灼いた。直撃であれば、重傷を負ったであろう。爆風に煽られるままに地を二転三転しつつも馬上筒を離さなかった然叡は、転がりながら引き金を引いた。

驚くべきことに、然叡の狙いは正確で、火の玉を生んだ人物を照準から逃さなかった。

火の玉を炸裂させたのは雀水である。生玉口の桜門で一虎と干戈を交えたのち、山里廓に退いていたのである。彼女の修験の術は奥妙で、念を天地の森羅万象に送り込んで、風火土水を操ることができる。然叡の皮膚を灼いたのは、『火産靈』の術である。

然叡に危険を予知する本能があるように、雀水にも本能があつた。その本能で、雀水は鉛弾を紙一重に躲した。

その間、照は妖銃の弾の装填を終えていた。彼女の鉄砲は、七連

発が可能である。その妖銃の照星を、然叡に向けた。

先ほど然叡に救われた格好となった一虎が、借りを返さんとはかりに、照に躍りかかった。照は後退したが、一虎はなおも槍を突きかかる。その槍を受け止めたのは、楽坊の六角棒である。

一虎は、また舌を鳴らした。清平もいるに違いない。面倒臭い奴らが来たと、多少鬱然とした。

「また会うとは、縁えにし（えにし）深いことよ」

楽坊は愉快げに笑ったが、一虎の感情は楽坊の感情から遠いところにある。「御坊」

と、楽坊に声をかけたのは重蔵である。

「その猪武者と拙者とは勝負の最中。勝手を申すが、この方に譲つてはくれまいか」

猪武者と呼ばれはしたが、一虎、満面に喜色を表した。両思いとはこのことであろう。が、楽坊は案外無粋者で、

「大事なのは秀頼公をお守りすること。ここは拙僧達に任せ、貴殿は他の賊が御殿に侵入せぬよう御門を守っておられよ」

と言った。楽坊の言っていることは半分正しい。実は、山里廓にはもう一人侵入者がおり、息を殺して潜んでいた。しかし、理ありと思しき楽坊の判断が、後に悔恨を生むことになる。

重蔵は愛刀を一旦鞘に戻した。重蔵のみるところ、力量と技量は一虎が勝る。しかし楽坊には粘りがあり、容易に崩れる気配がない。しばらく出番なし。そう考えて、重蔵は剣気を鎮めた。その時を待っていたのは、あの黒き陽炎が重蔵の深奥に植え付けた蟲である。蟲は鎌首を擡げ、ゆっくりと重蔵の心身を喰らい始めた。そのことにまだ気付かぬ重蔵の間合の外で、もう一人の侵入者が忍び寄っていた。

## 孤影集結（六）

とある国に、病気の息子を持つ男がいた。男は伊庭甚八郎いはじんはちろうと名乗り、剣の世界によくやく名を浮かべはじめた頃であった。

時は慶長五年。時代の奔流が、美濃国関が原へ向かってひた走っていた年である。

当時、剣術が盛んであった。上泉伊勢守、柳生宗厳、吉岡拳法、伊藤一刀斎など、剣一本に世を駆け上がった者がいる。「扶桑随一」「天下無双」、そんな言葉が剣一本に身を立てようとする若い兵法者にとつての憧れであった。

甚八郎は師の教えを乞う類いの男ではなかった。乞うならば天地にと嘯く（うそぶく）不羈ふきの男であった。その性情に相応しい剣の技量を備えていた。

甚八郎の伊庭氏は、元は有力大名に仕える武家の一族であった。戦に破れ主家は滅び、伊庭氏も甚八郎の父と兄が戦で帰らぬ者となり、母や甚八郎と弟姉妹は流浪の上に散り散りとなった。

甚八郎は幼いころより剣を好み、剣才も豊かであった。流れ着いた僻村で、略奪を働いていた野武士の一団を追い払った見返りに、村里離れの無人の屋敷に住むことを許された。甚八郎はそこで、病気の息子と暮らし始めた。

妻は既に逃げていた。元々同じ主君を戴く武家からきた姫で、気位高く、食うや食わずの流浪の日々と、剣以外顧みず仕官活動もしない夫との生活に嫌気が差したのである。親類の元へ行くという置き手紙を残して、ある朝にいなくなった。

甚八郎は妻を追わなかった。病気とは言え、息子は乳飲み子ではなく、妻が去って、むしろ重荷が一つ減った気さえしていた。

息子を妻の親類へ送るといふことも考えられただろうが、甚八郎にその思いは全くなかった。なぜなら彼は息子を深く愛していた。息子がいなくなれば、自分自身の存在さえ崩れ去るほどに愛してい

た。愛していながら、それに気付かない若さならではの過ちを、甚八郎は犯していた。

息子との生活を始めた村里離れの屋敷で、しばらくは息子の看病に努めた。一月もすると、剣の虫がうずき始めた。剣で天下無双を目指したい、いや目指せるはずという若い矜持がうずき始めた。

それから、甚八郎は屋敷に息子をおいて、長い時には十日以上も村を離れることがあった。息子の容体が比較的安定していたことと野武士から村を救ってもらった村人がその恩に報いるため、息子の世話を焼いてくれたからである。

村を空けた甚八郎は、街道や町に出て、名を持つ兵法者が現れるや勝負を挑み、打ち倒すことをしていた。そうしている間に己の剣名が世に浮かび、天下無双への道が現れてくると信じていた。

甚八郎の信念は、半ば正しかった。村に暮らして一年過ぎたある日、一通の書簡がやってきた。それは果たし状であった。京八流の流れを汲む兵法家で、山科宗次やましなぞつじという男の耳に甚八郎の名が届いたらしい。

山科にとってみれば、腕慣らしの余興に片田舎の蛙かわずを叩いてやるうという腹積もりだったに違いないが、甚八郎は文字どおり雀躍した。花の京都で剣名高い京八流の流れを汲む男を打ち負かせば、甚八郎の名は京都に届くであろう。京都はこの国の中心である。その中心に名が浮かぶということは、甚八郎の名が全国区に広がるということである。うまく行けば、本家の京八流を引き出すことも夢ではない。

甚八郎は一日に千の秋を数えるような焦れた思いで、果たし合いの日を待った。

ところが、果たし合いの数日前から、息子の容体が悪化した。高熱が出て、食事はおろか水さえ喉を通らない日が続いた。それでも甚八郎は、天下無双への階かたを諦めることはしなかった。

村人に息子の看病を頼むと、山科と果たし合う二日前に村を出た。町まで片道二日。往復四日の間に、息子の灯火が消えるなど、甚八

郎には思いも寄らぬことであつた。

果たし合いには勝つた。きわどかつたが、師は天地と嘯きながらその実ただの我流に過ぎない甚八郎の剣が、傍流とはいえ天下に聞こえた京八流の流れを汲む男の剣に勝つたのである。甚八郎が有頂天となつたのは当然である。

甚八郎は帰路を急いだ。息子に勝利を伝えたかつた。しかし、彼を待つていたのは、既に物言わぬ亡骸となつた息子であつた。伝えなかつた勝利の喜びは虚しいこだまとなつて、戸口から吹き込む寒々しい風に運び去られた。

村人は息子を荼毘に付し、粗末ではあるが墓も作つてくれた。村を救つてくれた英雄の子息に対する、それが村人の精一杯の報恩であつた。その村人に対し、甚八郎も礼を返すべきであつたらうが、彼の魂は空虚うつろであつた。

死の間際、息子はひたすら父を呼んだという。襟首を掴んで冥界に引きずり込もうとする死に神に抗うため、すぐるべき父の手を求めたのだらう。だがその父親は、愚かにも自分の名声を高からしめんために、守るべき息子を捨て置いた。息子の悲哀、恐怖、無念を思うと発狂しそうな後悔に苛まれなぐさ、甚八郎は精神の暴走を押さえるためには、心を空虚にするほかなかつた。

甚八郎は村を去つた。いや、去るといふ明確な意識はなかつた。ただ、どこかへ流れて行つた。彼はただ、息子の元へと逝きたかつた。冥府の鬼に脅えている息子を守り、息子が打たれるべき倍の数も、甚八郎はその体に打擲うちつけを受けたかつた。

ただ死んだのでは、息子は許してくれまい。剣に溺れ、剣に我を忘れた者は、剣に死すべきであらう。そう思い、甚八郎は片端から兵法者に当たつた。道場を荒らした。だが、これも因果かそれとも天罰か、甚八郎の命を奪つてくれる剣はなく、死合を重ねる度に、甚八郎の剣は研ぎ澄まされていった。そして、甚八郎は因幡から伯耆を通り、出雲も越えて、石見の国へと流れて行つた。

石見の宿場町で、甚八郎は異様な雰囲気をもとう男に出会つた。

男は初老から還暦にかかろうかという年恰好で、遠目にも分かる長刀を無造作に提げていた。甚八郎は直感で、かの男こそ己を息子の下へと送ってくれる人物と鑑定した。

男が泊まった宿の前の小川にかかった橋の袂で一夜を明かした甚八郎は、男が宿を出ると、その後ろを跟<sup>つ</sup>けた。街道に出て、行き交う人がまばらとなった辺で、男は道を逸れた。

しばらく行くと荒れ寺があつた。大きな松の木が濃緑の枝を張っていた。その松の根元で、男は立ち止まった。無論、この荒れ寺に用があるのではない。

「ここらでよかろう。邪魔もはいらん」

男はそう言つて、跟けていた甚八郎に振り向いた。

「わしに何用かな」

男の目に映る甚八郎に、生気が見えない。

「拙者と死合い、その長刀で我が身を斬つていただきたい」

「ほう」

と男は口を丸くした。不精髭の顎を搔きながら、

「わしは戸賀鉄雲齋とがてつうんさいという」

と名乗つた。名乗られれば名を返すのが礼である。

「拙者は『死なねばならぬ者』と答えれば十分な者」

と言う甚八郎の声に抑揚はない。

「左様か。死にたいのであれば手段には事欠かぬであろう。首の吊り甲斐のありそうな松もあるし、そこいらの岩で頭を打つても十分死ねる」

勝手に死ねと言いたげな鉄雲齋である。

「剣に死なねばならぬ罪を背負つております」

甚八郎には生気はないが、言い逃れを許さぬ鬼気がある。

「仕方あるまい。これも縁えにしか。袖擦り合うも縁。剣交えるもこれまた縁」

鉄雲齋は長刀をぎりりと抜いた。甚八郎も鞘を払つた。

一刀一足の間合いにみるみる剣気が増した。甚八郎には命を捨て

た凄みがある。迫る圧力はないが、その静かさが逆に危険であった。「ふふ、斬りたいと申しながら、こちらを斬る気満々ではないか」と、鉄雲斎は苦笑した。笑みを収めると、上段に構えた。甚八郎は正眼。

鉄雲斎の剣気は巨大ではない。だが、沼のような底知れぬ深さがある。甚八郎の足がじりじりと進み、彼の切っ先が鉄雲斎の間合いを越えた。途端に、鉄雲斎の剣気が暴発した。仁王の振るう六角棒のような圧倒的な質量が、甚八郎を襲った。

かん高い音がして、甚八郎の剣は砕かれ、虚空を舞った。甚八郎の左首筋に、鉄雲斎の長刀の刃があつた。

「斬り捨てる約束では」

甚八郎の目には恨みがある。

「そんな約束などしてはおらん」

鉄雲斎は長刀を鞘に収めた。返した背中中、

「お主を斬り殺せば、お主の罪をわしが背負わねばならん。古い先短い年寄りに、重い荷物を背負わせるものではない」と言つた。

鉄雲斎が数歩もいかぬうちに、その背後で物音がした。振り返えると、甚八郎が倒れていた。

「はて」

顎髭を掻きつつ、鉄雲斎は甚八郎を覗き込んだ。深い疲労が見えた。

「やれやれ、結局重いものを背負うことになつたか」

しぶしぶ言いながら、鉄雲斎は甚八郎を抱え上げた。

甚八郎が目覚めたのは、荒れ寺の破れた庫裡くらの中である。日はとうに暮れており、濃い闇の降りた板間に寝かされていた。

「起きたのならこつちへこい」

朦朧とする甚八郎の目には、手招きするのは地獄の鬼かと思えたが、よく見れば鉄雲斎であつた。

「寺は戦で荒らされたのだろうが、幸い竈かまどは使える。割れてはおる

が器もあつた」

鉄雲斎は飯を炊いていたらしい。亡霊のように竈の側に立った甚八郎は、鉄雲斎に言われるまま、土間に置かれた薪の束に座つた。「何日も飲まず食わずであつたのだらう。年寄りに米を買いに走らせおつて、馬鹿者が」

と言いながら、鉄雲斎は飯の盛られた器を甚八郎に持たせた。

「雑穀が交じつておるが、文句は言つまいぞ」

鉄雲斎は自分の器の飯を、一気に胃袋へ入れた。

「拙者を斬つてもらわねば困る」

零すように甚八郎が言つた。鉄雲斎は奥歯に絡んだ粟か稗かをほじつていた。

「そのことだがな」

代わりの飯を器に盛りつつ、鉄雲斎は言つた。

「お主を斬つてやらんでもない。じゃが、その前に、お主の腕を、せめてわしの白髪一本斬る程度にまで鍛えてもらわんな。戸賀鉄雲斎ともあるう者が、昨日今日剣を握り始めたひよつこを斬つたであつては、聞こえが悪い」

甚八郎は心の隅で何かが燃え上がる熱さを感じた。

「拙者がひよつこ」

「うむ。まさにひよつこ。お主にわしの剣が見えたか。見えまい。

ひよつこじゃよ、ひよつこ」

鉄雲斎は代わりの飯も、一気に腹に掻き込んだ。甚八郎の目に怒りが灯つた。それは良くも悪くも生気であつた。

「ふふ、飯を食え飯を。おぬしのために町まで戻つて購あかのつて参つたのだぞ」

鉄雲斎はひよつこの目に怒りという生気が戻つたことを喜んだ。甚八郎は盛られた飯をみた。確かに、鉄雲斎の剣は見えなかつた。ただ、圧倒的な質量を感じただけであつた。

息子を捨ててまで没頭した結果がこれか、と甚八郎は頬を歪めて己を冷笑した。

「おぬしが望むなら、わしが斬るに値するまで鍛えてやる。弟子は取らぬ主義じゃが、なに、これも縁えにし（えにし）じゃ。この縁を受け入れるなら、まずはその飯を食え」

鉄雲齋はそう言つて、三杯目の飯を自分の器に盛つた。甚八郎はしばらく自分の器に盛られた飯を見つめていたが、やがて箸を動かした。

翌日から、甚八郎の奇妙な修行が始まつた。彼は自分を斬り捨ててもらわんがために、鍛練を重ねるのである。

戸賀鉄雲齋は主を持たぬ流浪の兵法者で、行く先々の道場を荒らしたり、また逆に道場を守つたり、村の用心棒を請け負つたりして生計を立てていた。

甚八郎の鍛練といえばほかでもない。鉄雲齋の代理になつて道場主と木剣を交えたり、道場荒らしを追い払つたりしていた。そうやつて得た日銭で、鉄雲齋は酒を飲んだり、女を買つたりしていた。それでも三日に一度程度は、夕方に直接稽古をつけてやることもあった。

甚八郎が修業を始めてからまず思い知つたのは、鉄雲齋の途方もない強さであった。還暦に近いと思われる年格好にも関わらぬ旺盛な性欲には辟易へきえきした。それでもいつしか、鉄雲齋に近付きたいという一念が、甚八郎の精神の多くを占めるようになった。

息子の死を忘れたわけではなく、己の罪を誤魔化しているわけでもない。息子に日々謝罪しながら、あと五日、あと一旬、あと一季と、少しでも鉄雲齋に近づくために、死の期限を延ばしていた。

秋になつて、鉄雲齋と甚八郎は越前に入った。道場破りも用心棒の雇われ仕事も入っていない日、黙々と木剣を振つて剣理を悟ろうとする弟子を、鉄雲齋は銀杏の木陰に座つて、酒を食らいつつ見ていた。

酒の椀に銀杏が一枚落ちた。

「来たのか、隼蔵」

と問う鉄雲齋の頭上の枝に、人影が蹲ひづくまっている。

「ご様子を拝見に見参いたしました。鉄雲齋様におかれてはいつになく朗らかなご様子。ついに見つけられましたのか」

「うむ。あれがそうよ」

鉄雲齋は酒の椀で、甚八郎を指した。隼蔵は、獲物を狙う隼の目で、甚八郎をしばし凝視した。

「まだひよっこじゃ。じゃが鍛えれば大鷲にもなるひよっこよ。時折、様子を見に来るが良いぞ」

首肯した隼蔵は、そのまま飛び立とうとしたが、その背を鉄雲齋の野太い声が捕まえた。

「約束を忘れてはいまいな。わしが百を越えてまだ生き恥をさらしておれば、おぬしがこの首をかつ斬ってくれるということを」

鉄雲齋は右の親指を立てて、己が首を掻き斬る仕草をみせた。

「無論。ですが、あなた様が百になっても、まだ返り討ちに遭いそうな気が致しまする」

隼蔵は胸震いをさせてから、いずこかえ消え去った。鉄雲齋は隼蔵の置き台詞が気に入ったらしく、声はなく、顔だけで笑った。

その年の暮れに積もった雪が解けるまで、甚八郎と鉄雲齋は越前に留まった。関が原で天下の枢要を握った狸親父が征夷大將軍の宣下を受けた事など、流浪の兵法者には興味がなかった。

ある一日、通りすぎるだけの予定であった金物町で、刃物を商う店があり、何気もなく甚八郎は店先を覗いた。その店の軒先に無造作に置かれた一振の刀を見た甚八郎は、その一振から目が離せなくなった。

色香を発していた。美女を見た男が視線を逃しがたく感じるように、甚八郎の眼はその一振に捉えられた。

「旦那、その刀はいわくつきだ。商売上、軒先に並べちゃいるが、お奨めはしないね。何しろ、あの石田三成を介錯した刀だからね。その後、持ち主を点々として、そこに鎮座なさっておられるのさ。代々の持ち主は皆不幸になったとか、ならなかったとか。どうだい、刀を所望ならもっといういいものがある」

店の亭主はそういつて客の興味を移そうとしたが、甚八郎の耳には亭主の声が届いていなかった。

「ほお、見つけたか」

鉄雲齋は甚八郎の隣からその刀を眺め、目を細めた。

「我らにとつて刀は女と同じ。一目惚れれば、他人の諫言かんげんなど糞に集る蠅の羽音にすぎん。わしも、こいつに出会った時は痺れたものだ」

と、鉄雲齋は腰の長刀の柄を軽く打った。鉄雲齋に促されて、甚八郎はその色香の一振を手にとった。女の衣を解くように鞘を滑らせると、はだけられた刀身に甚八郎は恍惚こうごつとした。

「ふふ、よかろう。その一振、わしが購あがのうてやろう。おい亭主、いくらじゃ」

鉄雲齋は亭主の言い値の銭を支払った。

「教えを請う身が無心をしては」

という顔を甚八郎は作ったが、

「かまわん。おぬしのお陰で随分酒も飲めたし、女も抱けた」

と、鉄雲齋は意に介さなかった。

「さて甚の字よ。たまには団子など食うてみようか」

鉄雲齋は一軒の茶屋で団子と茶を頼んだ。甚八郎は鉄雲齋の隣に腰掛け、出された団子は手に取らず、茶だけを飲んだ。

鉄雲齋が団子など珍しい。もちろん、鉄雲齋の言う通り、たまの趣向変えかも知れないが、甚八郎は団子を黙々と食らう鉄雲齋の背中に、常時にはない雰囲気を感じた。

この茶店から街道は二手に出ており、一方は越中へ、一方は近江へ通じている。鉄雲齋が何かを言い出すのであれば、恰好な場所と甚八郎には思えた。

鉄雲齋は団子を三皿平らげた。茶を飲み、楊枝で歯をこすり、時折、店先に咲く梅花を見て笑っていた。

勘違いだったかと甚八郎が思いかけたとき、脈絡もなく、鉄雲齋は言った。

「まだ死にたいかね」

誰に言っているのかも分からぬ何げなさであったが、甚八郎に向けた鉄雲斎の目は、何とも涼やかで、奥深かった。

(この人は明王の化身か)

甚八郎は弾かれたように地に降りて両手を土に付けた。明王は迷える衆生を憤怒の表情で導きながら、その底には無限の慈悲を秘めるという。

「どうかね」

鉄雲斎は重ねて問うた。甚八郎は土に視線を向けた。死ぬべきだとは思っている。しかし、死にたいという心の叫びは、既に小さくなっている。

「焦らずとも、人はいずれ死ぬ。わしもな」

鉄雲斎は視線を甚八郎から外し、紅い花を咲かせる梅をみた。

「甚よ。お主がいかなる罪を背負うておるのか、わしはついぞ聞かせてもろうておらぬ。それはよい。お主がその罪の重さと厳しさを知っておれば、それで十分じゃ。わしはな、この齢になるまで随分と諸国をさするうてきた。じゃが未だにわしは天地の全てを知らぬ天地の懐の何と奥深きことか。その天地に、もう少し生きてみても良いのではないか」

師の真心に触れた甚八郎は、地に付けた手で土を握った。肩が震えた。心の中で何度も息子に詫びた。嗚咽が漏れた。

弟子の心が平らかになるのを待って、

「お主と出会ったのは、石見の国であつたな。甚よ、今日この時から伊庭甚八郎の名を捨て、石見重蔵と名乗るが良い。箔を付けたければ、戸賀流とも雲流とも名乗れ」

と言った鉄雲斎は立って、二手に分かれる道を指し示した。

「ここはまさに別れるに相応しい場所よ。わしは南に行く。梅咲く春とは言え、年寄りにはまだまだ朝夕冷えるからな。お主は北へ行く。まだ深き雪に分け入って、北の果てへまで行くが良い」

鉄雲斎は背中ですう言い残すと、そのまま梅の木を右に折れ、甚

八郎を振り返る事なく、近江へと続く道を歩いていった。

甚八郎いや石見重蔵は、春の霞に見えなくなるまで、師の背を見送った。やがて立ち上がり、ゆつくりと北へ向かって歩みを進めた。北の国は、行くにつれ天と地の間が狭くなる。だが、重蔵の心は解き放たれた。

そして十余年。重蔵は大坂城山里廓に立つ。

師によつて解き放たれたはずの心が、また囚われようとしていた。黒き陽炎が重蔵の心奥に植え付けた蟲が蠢き始めたのである。

十河一虎と、無心で剣と槍を交えていた方が良かったらう。重蔵を温存し、一虎を留め置ける優位が大坂方にあつたことがいけなかつた。

心奥で蟲が囁く。失つたものを取り返せる、と。

息子を取り戻す。父上と呼んで輝くあの笑顔を、もう一度腕に抱くことができる。重蔵にとつてそれは、冥界の鬼と契約を交わすことも躊躇せぬ誘惑であつた。

「裏切るのだ。裏切つて息子を取り戻せ」

蟲が囁く。しかし重蔵、分別を知る男である。死んだ者が生き返るはずはない。蟲の囁きを冷笑で押し返す心の勁さを、まだこの時の重蔵は持つていた。だが、重蔵に隙ができたことは確かである。その隙を。

重蔵の間合いの外の暗闇に潜んでいた細身の薙刀が、瞬時に夜を走つた。咄嗟に身を屈め、重蔵、何とか薙刀の一閃を躲したが、屋敷内へ敵の侵入を許してしまった。

「お、やりおつたな、姫御」

一虎が吠えた。一虎等が姫御料と呼ぶ薙刀娘が、ついに迎撃の布陣を突破したのである。一虎は、眼前の楽坊等を放り出して、姫御料と重蔵の後を追つて屋敷に駆け込んだ。

姫御料は駆けた。さして広い屋敷内ではない。奥まった一室で、姫御料はついに見つけた。母親と身を寄せ合う大坂城主、天下人豊臣秀吉の残り火である男を。踏めば消えるだけの無力な男を。

しかし、その無力な男と姫御料の間には、まだ一枚の障壁があった。

豊臣家最後の忠臣、毛利勝永である。勝永は狼狽えることなく佩刀とうを抜き、暗闇を割って現れた若い女を迎え撃った。

かつて天下を主宰した豊臣の威光も、今や大坂城の一廓に建つ一棟の間を照らす蠟燭に過ぎなかった。その蠟燭の光量に数倍する明滅が、薙刀と刀の絡み合いに生まれては消えた。

姫御料の後を重蔵が追い、その後を一虎が狂虎の如く続いた。その狂虎を最後の一間に入ては、豊臣の光は消える。

重蔵が走り去った闇の梁から、一筋の鋭い光が降り立った。それは重蔵が持つ短刀のきらめきであった。一虎の眼前に立ち塞がった重蔵は鋭く回転しながら、物も言わず、一虎に斬りかかった。この男を容易く抜くことはできぬと直感した一虎は、強く舌を鳴らした。重蔵は最後の一間に辿り着いた。勝永と姫御料が激しく斬り結んでいた。光量の乏しいその一間で、重蔵の愛刀の白刃が鮮やかに浮かんだ。

その間の誰もが姫御料を貫くとみた白刃は、しかし姫御料の傍らを擦り抜けた。

『殺せ。殺すのだ』

重蔵の心奥に巣くう蟲の声は囁きではない。脳髓に達する叫びとなっている。

『殺せ。殺すのだ。淀の方を』

姫御料を擦り抜けた白刃は、真つすぐに淀の方へ向かった。

親が子に向ける愛に等しいのは、子が親に向ける愛である。咄嗟に、秀頼は母の盾となった。

白刃は深々と貫いた。豊臣家最後の光である秀頼の胸を。

一間の時間が止まった。秀頼の背を貫いた切っ先から流れる赤い血だけが、時の束縛を逃れていた。

重蔵の目が、息子を刺し貫かれた母の目と重なった。淀の方の表情は能面のように白く、無表情であった。天下人が愛した佳麗な容

貌が瞬時に崩れ、鬼面と化した。

凄まじい鳴動が発せられた。最後の一間を、山里廓を、大坂城を、二十万の軍勢が群がる上町台地を、鳴動は激しく揺さぶった。その激震の中心にいた重蔵は、身を微塵に碎かれるような衝撃を受け、その衝撃を悟らぬままに、本身から魂が引き剥がされるのを感じた。そして、全てが闇となった。

## 孤影集結（七）

人の群の中にいた。黙々と螺旋階段を登る人の群だ。鎧武者もいれば白袴の侍もいる、僧形もいれば烏帽子公家もいる、百姓もいれば町人もいる、富者もいれば貧者もいる、老人もいれば子供もいる人の群だ。螺旋階段の終わりは遙か高みに見えず、始まりもまた遙か底に見えない。

螺旋階段は所々で枝分かれし、別れた道はまた別の螺旋階段に繋がっていた。その螺旋階段もまた、終わりも始まりも遙か茫漠の彼方であった。

雲海の中にいるようなものである。ただ広がる白の空間で、雲間に見えるのは終わり始まりの知れぬ螺旋階段である。

ここは、白と螺旋階段と黙々と登る人の群の世界であった。

次にたどり着いた枝分かれの場所で、それまで登っていた螺旋階段を逸れた。別れた道を行こうとすると、

「そちらではない」

と、呼び止める声がした。振り向くと記憶に軽く触れた姿があった。

「そなたは」

そう、その姿の女は、確か、あまこのあみぎり天戸朝霧という名であったはず。朝霧の瞳が間近となり、彼女の温もりを全身に感じた。

「あなたはまだそちらに行くべきではない」

囁く朝霧の記憶は剣撃の記憶に繋がる。そうであるはずなのに、このまま両手で彼女の温もりを抱き締めても良いような気がした。

朝霧の頂の白さがそのまま一陣の白霧となり、そのまま両手の中の温もりが虚しくなった。そして、夢は終わった。

重葭が見上げるのは高い空である。隼だろつか、黒々とした翼が、切るように青い空を飛んで行く。重葭は眉を顰めた。空が眩しすぎ

る。何より、頭蓋の中の鈴の音が喧しい。

ぬつと顔が覗いた。逆光の陰に黒々とした顔には、凜と輝く二つの目が付いていた。

「おぬし、今、空を飛んでいたであろう」

重蔵が言つと、逆光の顔がにやりと笑つた。

「何を惚けておる」

それは隼蔵であつた。隼蔵を見て、ようやく重蔵は体の重みを感じた。それは、自分が存在しているという知覚であつた。

草の匂いがした。草むらに寝転がっていたらしい。空の遠くで、黒の点となつた隼が見えた。

「あの隼は、おぬしかと思つた」

意識の半分をまだ完全に取り戻せぬまま、重蔵は呟いた。

「甲賀の蒼き隼と呼ばれたおれだが、さすがにあそこまで高い空を飛べはせぬ。この隼は、地をさすらう隼ゆえ」

重蔵の見る同じ隼の影を視線で追いながら、隼蔵は目を細めた。今日の空は、やけに眩しい。風が吹いて、隼蔵の左の袖が軍旗のように波打つた。隼蔵のその腕は失われている。

「拙者を斬るかね」

と、抑揚なく重蔵が言つた。そのためにこそ、この隻腕の隼はこの地に舞い降りたと、重蔵には思えた。

「斬る？おぬしを？おれがか？」

隼蔵は軽い驚きを目容に表した。しかし、目を丸くしてみせたのは、隼蔵の諧謔で、彼には重蔵がそう問わざるを得ない理由を良く理解していた。

「そつだ。おぬしになれば、斬られても良いと思つ」

重蔵には、自分は斬られるべきだという思いが強くなる。自問するも愚かしい理由がはつきりとある。耳の奥には鈴の音が残り、四肢の先には甘い痺れが残っているが、腕にもはつきりと残る感触があつた。

重蔵は、秀頼を刺し貫いたのである。深々と突いた。よもや、命

を拾い得たとは思えぬ。

「ふふ、刎頸の交わりとは雅趣よな。おぬしに言われては、悪い気はせぬ」

隼蔵には朗らかさがある。そこが重蔵には不可解であり、多少、癪にも触れた。

「拙者はいわゆる裏切り者だ。黽らずに、疾く処罰を言い渡してはどうか」

裏切った方が殊勝さを見せているのに、裏切られた方が惚けている道理があるか、と重蔵は口を尖らせた。その素直さが、隼蔵には心地よい。剣においては不遜傲岸極まりない男だが、心根は童子のように表裏がない。

「おれは裏切られたつもりはないぞ」

「何を申す。拙者は」

そう言った重蔵は出かかった言葉を留め、代わりに己の両手に視線を落とした。黒き陽炎が放った妖言にまんまとたぶらかされた未熟さが腹立たしい。同時に、不可解さもある。脳髓の声は、秀頼ではなく、その母を殺せと叫んだ。秀頼でなかったのは何故か。

それは虚しい自問であろう。何を詮索しようと、妖言に負けて秀頼を貫いたという事実は、ただ重蔵をして自嘲せしめるのみである。「秀頼公を弑し奉ったと、そう申したいのか」

「・・・あえて問うこともなからう」

「大坂は落ち、豊臣二代は露と消えた、と？」

「名も無き素浪人に幕引きされたとあつては、太閤殿も泣くに泣けぬであろう。いや、案外、わしの世の終わりに相応しいと思し召されたか」

そう言つて、重蔵は笑った。その乾いた笑いは、彼の虚無感から発せられている。

「まず起き上がるがいい。そして見よ」

重蔵の虚無感を微笑で包んで、隼蔵はそう促した。億劫であったが、重蔵は草むらに横たえた体を起こした。そして見た。

まず、天があつた。白い雲があつた。黒々とした大地があつた。そして天と地の間には鮮やかに立ち、白い雲の行く手を遮ろうとするばかりの、巨大な城郭があつた。

絢爛たる城姿である。堀の水は青々として自若。石垣は皓々として巍峨<sup>ぎが</sup>。天守は碧々として壮麗。人はその城を錦城と呼ぶ。

重蔵は眼を疑<sup>まよ</sup>つた。しかし、彼の網膜に鮮烈に焼き付くその城姿は、紛れもなく豊臣の大牙城である大坂城であつた。

「どうということだ」

重蔵の呟きが深い戸惑いに揺れた。

「信じられぬか？」

隼蔵は、重蔵の戸惑う心をかき乱さぬよう、穏やかに問うた。

「これが信じられる者は、森羅万象の理を諳<sup>そとん</sup>じ、自在に操る者の存在を知る者である」

「そうかも知れぬ。だが、あの城は幻でなく、ましておれが砂をかき集めて造つた砂城でもない」

「あの城には、拙者の剣に貫かれたはずの秀頼公がおわされると？」

「そうだ。おそらくはあの天守で、下界を睥睨<sup>へいげい</sup>なさつておられるに違いない。おお見よ」

隼蔵は、西の大地を指さした。彼らは今、大坂城を西北に望む小山の裾にいる。その小山は名を茶臼山というが、重蔵はその名を知らなかつた。

促されるまま見た先の黒い大地に、武者の群が進んで行く。兜の前立てと槍の穂先をきらきらと、長宗我部の紋を打つた旗指し物が整然と行く。

「長宗我部盛親殿の軍勢だ。さすが四国を蹂躪した兵共。何度見ても、見事なものよ」

隼蔵は残された腕を翳して、しばし長宗我部の行軍の様を楽しんだ。ちらりと傍らを見ると、重蔵が黙然と、長宗我部の旗を掴み取らんばかりの眼力の激しさで、長宗我部勢を凝視していた。

「摩訶不思議なる現象は、実は有るところには有るものだ。お主の

知る大坂の戦は夢だったと思え。大戦はこれから始まるのだと心得れば受け止め易い」

隼蔵は、あえて説明しなかった。余計な説明は、理解よりも混乱に近づけることがある。

「隼蔵よ」

「ふむ？」

重蔵は、半歩、隼蔵に寄った。

「拙者は分からぬものを無理に分かるうとする者ではない。有るがままを有るがままに腹に納める者だ」

「結構なことだ」

「だが一つだけ明確に答えてもらいたい」

「よかるう」

「拙者は今、現まっに生きておるのか」

重蔵の問いは、隼蔵には愉快であった。なぜならそう問うた過去が、隼蔵自身にもあつたからだ。隼蔵は、草木が振り返るほどの大声で笑った。

「案ずるでもなく、おれとおぬしは現に生きておる。疑うならば、草を抜いて食うてみよ。青臭く苦ければ、おぬしはまだ生きておるということだ」

隼蔵は、足元を指さした。枯れ色が目立ち始めた草むらが、風に揺れた。

「安心した。現に生きておるならば、それで良い」

草を食むまでもない、と重蔵は笑った。

重蔵は目に見える風景をそのまま受け入れる腹を決めた。分からぬことをあれこれ疑ってみても益はない。黙って飲み込んだ方が良い時もある。

「重蔵、一つ覚えておけ」

と、隼蔵が真顔でいった。

「頭の奥で、まだ微かに鈴の音が残っていよう。その音を覚えておくことだ。そうすれば、おぬしは時の螺旋から外れることはない」

そう言われた重蔵は、また眉を寄せねばならなかった。ようやく信じ難い現実を受け入れたというのに、隼蔵はまた新たな謎をかけた。しかし確かに、頭の奥に鈴の音が残っている。

「さて、我らも城へ行こう。いずれ何千という旗指し物が山を覆う木々のように並び立つ。なかなかの壮観よ」

重蔵を誘いながら、隼蔵は小山の裾を降りていった。残された重蔵は、しばし去就を思い巡らせた。答えはすぐに出た。不可解な城ではあるが、あの者だけは斬らねばならぬ。亡き息子への愛を弄び、重蔵をして裏切りの苦さを味わわせた者を斬らねばならぬ。たとえ重蔵に、亡き子を愛す資格がなかったとしても。

重蔵は、左腰の愛刀の柄に左の肘を乗せて、左腕の重みを愛刀に預けた。ぶらりと歩く時の、それが重蔵の癖である。そのまま小山を降りた。

長宗我部勢を迎え入れたのか、俄に起こった歓声で、城が揺れた。

## 花の陣（一）

真田幸村という人は不運な人である。偶像としての彼の名のみが大股に闊歩し、実在の彼は置き去りにされている感がある。

不運というのはそれではない。歴史上、彼が彼の名で彼の兵を率いて戦ったのは、大坂の役ただ一度である。関が原前夜、徳川秀忠三万の兵を城に引き寄せて足止めした第二次上田合戦において、あるいは幸村は一隊を指揮したかもしれないが、この戦いにおける神算知謀、戦上手の名声は、父昌幸の名に覆い隠された。

幸村の戦差配が、親の名という逆光に目をくらまされる事なく衆目に映ったのが海内最大にして最も壮麗であつた大坂の役であつたことが、彼の不運だと言えるのではないだろうか。

大坂の役は、豊臣という空洞となつた巨木が倒れる最後の過程である。その崩れ行く巨木に最後に咲いた花が幸村であつた。その花を衆人は愛し、褒めたたえ、人の口は真実を伝えるだけでは飽き足らず脚色を加えるのが常であるから、いつしか稀代の天才天災軍師真田幸村像が巷間に広がつた。

ところで、真田幸村という人物は、実は歴史上に存在した気配がない。巷間、真田幸村として伝わる人物は、実は真田信繁である。大坂の役の間際に、信繁から幸村へ改名したという説もあるが、それを裏付ける史料は見つかっていない。真田幸村という英雄は、信繁が散り際に見せた華やかさ、鮮やかさ、清々しさを愛した人々が創り出したフィクションなのである。その虚構に本体を奪い去られたことが、真田信繁の最大の不運ではないだろうか。

それはさておき、この物語では、信繁は幸村として演じていただけくことにする。本人には失礼ながら、確かに信繁よりも幸村の方が、名に爽やかさがある。

さて、幸村が、関が原の敗者として幽閉されていた九度山に豊臣の使者を迎えたのは、慶長十九年、幸村四十九歳の時である。豊臣

家としては、幸村の父昌幸を迎えたかったに違いない。しかし、昌幸は既に亡く、次善の策として、昌幸とともに歴戦を経た真田の兵を得たいがために幸村を招こうとしたのではないだろうか。そうではなくては、将としての経験に乏しい無名の虜囚に、準備金として黄金二百枚、銀三十貫目という大枚ははたくまい。

豊臣の使者は、高野山の一舎で幸村と対面したとき、内心に失望を抱いたに違いない。なにしろ昌幸の名が大きい。上田城で二度に渡って徳川の大军を撃退した昌幸は、大坂城で徳川傘下の大军を迎えうたんとする豊臣方においては、まさに軍神を招来するかのような気分であつたろう。その気分のまま、昌幸の血をひく幸村を見た時、その者は鼻白むか、若しくは訪ねるべきを人物を誤ったかと思つたろう。それほど、使者の前に佇む幸村の姿は貧相であつた。

冷静に考えてみれば、幸村は十数年も高野山の一隅で囚われていた男なのである。腹に入るものは粗食で、日の当たりも十分ではなかつたろう。なんとか生きていただけの男なのである。そこに、一声十万兵を叱咤督戦する軍神像を求めるのは、岩をめくってその下に孔雀を求めるような愚かさに近いだろう。日の乏しいじりめりとした土には、それに相応しい生き物しか棲まない。

しかし、豊臣の使者は故事を知るべきだろう。大陸において曹と孫と劉とが覇を競っていた時代、身なりの芳しくない青年がいた。彼は風貌の貧しさから人の評価を得ることができずにいたが、やがて人物鑑定の名人である司馬徽しはに出会ったことにより、彼の才に相応しい評価を得ることになる。青年の名は？ほうとつしげん統土元とうつげんといい、後に、領地の乏しい劉備玄德をして豊潤な蜀の大地山河の主と成さしめるのである。

真田幸村の不運は、彼の司馬徽に出会うことがなかつたところにもある。彼に？統土元とうつげんに比する才能が秘められているのか否かは別として、ともかくも豊臣の使者は幸村に大坂への入城を請うた。

幸村は要請に諾の答えを返したわけだが、彼に豊臣家に対する篤い忠誠があつたかどうかは分からない。豊臣家での人質時代、天下

人秀吉からの覚えは目出度く、豊臣の姓すら賜っている。だが、それだけで無二の忠誠を捧げるようになるほど、戦国の男はお人好しではないだろう。まして、当代の秀頼とは面識すらないのである。幸村が大坂入城を決心したのは、彼が長年心中に蓄積してきた自己顕示欲を満たすには、大坂が相応しいと睨んだからではないだろうか。あるいは、彼には父昌幸に対する拭い難い劣等感があつて、父が三万八千の徳川勢を退けたのなら、自分は十万を優に越えるだろう徳川勢を退けてやろうと目論んだのかもしれない。

いずれにしろ、幸村は支度金として給された黄金二百枚と銀三十貫目を使つて、旧臣を呼び寄せた。かくて、密かに九度山を抜け出した幸村は、旧臣共と合流し、騎馬百騎、兵五千を引きする将としての待遇を得て、堂々、大坂城に入城したのである。

後世、真田は赤備えでも知られることになるが、上田時代、またはそれ以前から赤備えを軍制として常態にしていたわけではない。他に赤備えといえは井伊家が有名だが、こちらも先祖代々の習いではない。徳川が武田の遺臣を多く召し抱えた時、彼等を井伊家に配属させたわけだが、武田軍は色で軍団を分けており、特に山県政力ゲの赤備えが勇猛で知られていたため、それに肖あやかつたのだろう。朱槍も同様であるが、赤色は家中随一の猛者に許される色なのである。このことから、幸村が大坂方に与したのは、自らの武名軒昂を願つてのことと推し量れる。

浪人の売名行為はむしろ時代の常套手段であつたが、それを好まない者もいる。茶臼山の斜面で、秋枯れの草を食はみながら、真田赤備え勢の大坂入城を眺めていた石見重蔵がそうであつた。功名を追い求める者の姿は、かつて子を喪つた頃の重蔵を思い起こさせる。食む秋草の茎の汁と一緒に、それ以上に苦い味を重蔵は吐き捨てた。

重蔵は秀頼に謁見した。秀頼は微笑を絶やさず、ただ、

「再び相見あいまみえて何より」

とだけ言い、重蔵は静かに頭を下げただけである。

謁見を終えると、勝永が待つていた。

「そなたの刺突はさすがに鋭いな。防ぐ術もなかった」

と、刺された本人の秀頼すら口にしなかつた皮肉を言った。勝永の目容は朗らかで嫌みはなかつたが、重蔵は露骨に眉をしかめた。重蔵、自分が皮肉を言うのは好きだが、人に言われるのは嫌いであつた。

「さて、これからどうするつもりかな」

勝永は、重蔵の不服顔を意に介さない。さすが数千の兵を縦横に率いる武将は、個人の意中など気にもならぬものらしい。

「防ぎ得ぬ刺突は、近くに置かぬが良いと存ずる」

重蔵は憮然と言つた。

「怒るな。戯れ言を申したまでだ」

勝永は重蔵を手招きし、一室に導いた。勝永が胡座をかくより早く、重蔵はどすんと腰を落とした。

「秀頼公のお命を狙っている輩がおること、十分納得してもらえたことと思つ」

勝永が切り出すと、重蔵は苦みを満面に広げた。

「拙者もその一人なれば、納得せぬ道理はござらぬ」

「存外、根に持つ御仁だな」

「別に」

重蔵は鼻を搔いた。

「根に持っているわけではござらぬ」

「それは安堵した。さて、もう一度お尋ねしよう。これからどうなさるおつもりか。もちろん、こちらとしては、引き続き与力を願いたい」

重蔵は、横を向いて格子窓から見える空を見た。趣旨返しに、そつぽを向いたわけではない。季節を確認したかったのである。たしか、徳川と豊臣の戦場に放り出されたのは、夏の入りであつたと記憶している。ところが、格子窓に切り取られた空の高さを見れば、今は秋も暮れのようだ。格子窓から見える薄が左へ右へと揺れ、蟋蟀が一匹とまつた。

「この城は、季節の移ろいが早いらしい」

重蔵は勝永に問うたわけではなかったが、勝永は重蔵の呟きを拾って、

「四季の移ろいもそうだが、時間というものは、何も一本道ではない」

と言った。扇子を持った右手で渦を描く仕草をし、

「螺旋よ。渦を描いておるのだ。橋を渡すことができれば、時を溯ることも不可能ではない」

勝永はそつたとえたが、生憎、重蔵には理解が及ばない。勝永の譬えに重蔵が同調できていないことは、格子窓に向けたままの視線が、そこから外れないことで分かる。

「まあよい。いずれ分かる。さて、返答をいただきたい」

と、勝永は重蔵の横顔に問うた。おもむろに勝永を正面に見た重蔵は目尻を細め、

「我が刺突が再び秀頼公を狙うことになれば、なんとなさる」と言つて眼光を強くした。

「そのときはそなたを討つことにしよう」

こともなげに、勝永は言ったが、すぐにその言葉を払いのけるように、

「だがその心配は無用であろう。同じ術に二度はまる貴殿ではあるまい」

と言つて、値踏みするような目で重蔵を見た。重蔵の眼光が危険な色を帯びた。無論、その危険は勝永に向けられているわけではない。

「人に従うのは、やはり性に合わぬ。だが、拙者に盲欲の種を植え付け、つまらぬ剣を振るわせた者は必ず斬り捨てる所存。それまでは城中をうろつかせていただく」

それが重蔵の返答であり、胸中に溜まった膿を吐き出すような苦さと一緒に、重蔵は言い捨てた。

「それであればこちらは構わぬ。貴殿がこの城に留まってくれらるこ

とに変わりはない。貴殿の剣が斬るべき者に向けられている限り、こちらの望みは達せられているということになる」

勝永は裾を鳴らして立ち上がった。重蔵から十分な答えを得た勝永は満足げであった。

「しばらくこの城は真つ当な戦をする。その間、城内の人物に会うと良い。おもしろい人間が集まっている」

と、勝永は助言したが、重蔵はつまらぬといった顔を横へ向けた。「功名欲しさに集まってくる輩は気に食わぬか」

「とくに銭に釣られるような輩は」

「手厳しいな。小金に乗るのは小望だが、大金には大望が乗っていることもある。無理にとは言わぬが、退屈しのぎにはなる」

そう言つて勝永は部屋を出た。その拍子に、薄の蟋蟀が跳んだ。重蔵も腰を上げた。

本丸御殿から外に出ると、秋も終わろうとしているのに、むせ返るような熱気がある。無理もない。十万の兵が集結しているのだ。その熱さを避けられる場所を、重蔵は探した。当然のことながら、御殿では至る所に見張り兵が配置されている。彼等に誰何されるたび、毛利勝永様召し抱えの者と応えようと、それ以上詮索されることはなかった。

いくらか探さぬうちに、棟と棟の陰になつている中庭があり、そこに薄の一群れが揺れていた。戦時であるから、庭の手入れも雑であるようだ。勝永と対面した部屋で、格子窓越しに見えていた薄は、これかも知れない。

日の陰ともなつているそこは、ひやりと涼やかであった。小池があり、朱色の小橋が架かっている。そこに、人影があった。なぜか背筋を氷で拭われたような冷気を感じた重蔵が先客を見ると、艶やかな着物のその人物に見覚えがあった。淀の方である。

豊臣家主君の母ともある人物が、従者も引き連れず、人目に付かぬ中庭に一人佇んでいる風景は異様である。その異様さを感じる以上、重蔵の胸中には黒い炎が渦巻いた。

「淀の方を殺せ」

と、耳の奥で鼓膜を灼くような声がした。あの黒き陽炎に植え付けられた蟲<sup>むし</sup>が、まだ息を潜めているらしい。重蔵は愛刀の柄を掴んだ左手を、右手で払いのけた。勝永に言われるまでもなく、二度同じ術中に嵌<sup>は</sup>まる気はない。しかし、苦さは口中にも胸中にも広がった。

淀の方が気づかぬうちに、重蔵は中庭を去ろうとした。その背中へ、

「重蔵様」

と、不意に掛かった声がある。男の熱情をいきり立てるような淀の方の妖艶な声ではない。振り向くと、いつから居たのか、神楽の笑顔があった。日の陰に射されたその笑顔は生気に乏しく、重蔵に石木を思わせた。

「神楽殿か」

重蔵の驚きを黙殺して、神楽は重蔵の間合いに踏み込んできた。しゃん、と鉄環が鳴る音がした。神楽は手に錫杖を持っている。その錫杖が前触れもなく唸った。かっとな火花が散った。重蔵の左腕が瞬時に腰の愛刀を引き上げ、その鰐元が錫杖を受け止めた。

何と重い一撃であろうか。不意を食らったこともあり、重蔵は一歩二歩と退き、三步目によく踏ん張った。錫杖には一尺余の鎌刃が生えており、重蔵の反応が遅れていたならば、彼の首はごろりと落ちたことだろう。

「神楽殿、どういわけだ」

齒を軋ませながら重蔵は言った。齒を食いしばって耐えなければ、圧殺されそうである。少女のような神楽の細身の、どこにこんな力があるのか。

重蔵は草地を蹴った。押される力を利用して後方に大きく跳び、着地した時には二尺八寸の愛刀をきらりと抜いていた。

「どういわけか、神楽殿」

重蔵はもう一度言った。神楽は笑顔である。背筋を冷たくする笑

顔である。

「重厳殿はまだお迷いのご様子。お心の声に悩まされませぬよう、いつそ楽にして差し上げましょう」

歌うように言いながら、神楽はするすると重厳の間合いを侵してくる。次に風を唸らせたのは、重厳が早かった。真つ向から斬り下げた。流石に重厳も容赦はしない。神楽の額を割つたと見えたのは幻で、重厳の斬撃は錫杖に滑って受け流された。流れた重厳の態勢へ、神楽の錫杖が一閃。それは背後へ跳んで避けたが、視界に飛び込んできた黒い物体が、重厳の右肩を激しく撃つた。激痛が走つた。神楽の鎌刃の付いた錫杖の柄から、鎖に繋がれた分銅が飛来してきたのである。鋼に鍛えた筋肉に覆われた肩は容易く骨を砕かせないが、右腕全体が痺れた。右腕をだらりと下げた重厳は左手一本で剣を正眼に構え、強く口を結んだ。不覚であつた。

神楽はふわりと舞つた。地に降りたとき、一閃で重厳の首を落とすことのできる距離であつた。重厳は冷えた笑顔の神楽に、死の色を見た。

激しく地を揺さぶる音がした。堤に盛り上げた土を築く大木槌の音である。重厳と神楽が同時に見た先には居たのは破れ袈裟を着た大男である。楽坊であつた。手には鬼が持つような大六尺棒を携えており、それを地に打ち突けたとみえる。

「御坊・・・」

神楽が小さく言った。

「仏に仕える身の眼前での殺生沙汰は見過ごせぬな」

「ぬけぬけとおっしゃられますな。その棒きれに染み付いた血の主が不服を申しましょう」

神楽が言つと、楽坊自身、自分の物言いがおかしかったのだらう、大音声で笑つた。

「いうないいな。昨日は昨日、今日は今日じゃ」

一頻り笑つた楽坊は、笑眼を重厳に向けて、

「さて石見殿、貴殿も刀を下ろしなされ。貴殿を脅かすものは、も

うどこにもない」

と言った。怪訝に思った重蔵が楽坊に向けていた視線を元に戻すと、小池に架かった朱色の小橋が見えた。神楽の姿は、吹き消されたようにどこにもなかった。

幻を見ていたわけでも、魔や狐の類いにたぶらかされていたわけでもない。それは右肩に残った痛みが教えてくれた。痛みはあるが、右腕の痺れはほぼとれた。二三度肩を回してから、重蔵は愛刀を鞘に収めた。そのまま立ち去ろうとする重蔵に、楽坊が呆れた声をかけた。

「随分と淡泊じゃな。おぬしは今、命を落としかけておつたのだぞ。その理由なり因果なりを求めんのか」

「求めて得られるものならば、求める」

「ふむ、執着せぬことはよいことじゃが。せめて礼などもらえぬものかな。拙僧が通りかからねば、おぬしの首はころりと落ちて、十日と経たぬうちに薄に覆われた一景色と化しておつたらうに」

言葉どおりに礼を求めているのではないことは、その声色で分かる。少し重蔵と話したいようだ。重蔵もそれを黙殺するほどの人嫌いではない。それに、助かったことも確かである。重蔵は楽坊へ頭を下げた。

「いやいや、よいよい。おぬしと拙僧の仲ではないか。拙僧の貸しを覚えておいてくれればそれでよい」

煮ても焼いても食えそうもないとは楽坊のことであろう。

「ところで、先程、勝永殿におうた。おぬし、城に残るそうだな」  
「御坊との仲だからではないぞ」

楽坊は気に入ったようで、それはそうだろうと笑った。

「しばらく城に残るのであれば、どこぞの陣で戦働きをしてはどうか。おぬしの腕であれば、千石で召し抱えたいと申し出る者もいよう」

重蔵は横を向いた。その手の話には興味がない。

「それよりも御坊。この城で勝永殿の意を受けて秀頼公を守ってい

るのは誰と誰だ」

考えてみれば、隼蔵と神楽以外はよく知らない。隼蔵と神楽のことも知っているとはいえないが。特に、神楽には今し方殺されそうになった。他にも殺されそうになる者がいないとも限らない。

「そうだな」

楽坊が指を折りながら教えてくれたのは、

豊臣の忠臣 毛利勝永

甲賀の青き隼 隼蔵

氷面の神楽舞い 神楽

蔵王の寵姫 雀水

洛内の浮浪者 今出川清平

雑賀の八幡権現 碧

である。無論、これに重蔵と楽坊が加わる。

「参考になった。神楽殿以外、寝首を搔かれそうなお覚えのある名がなくて安心した」

「その神楽殿だが、おぬしには何と見えた」

重蔵は楽坊の顔を見た。問の真意が掴めなかった。

「経緯はしらが、神楽殿は淀の方に育てられたそうだ。だが、太閤殿下のご寵愛を受けていながら、隠し子とも思えぬ。いずれにしろ、神楽殿が淀の方を慕うところ母親以上であることは確かよ」

「その淀の方を殺しかけたのが拙者というわけか」

「そういうことだ。襲われた理由は、案外明白であったな」

「だからといって喜ぶ気にはなれぬ。ところで、どう見えたとは」

「そなたの眼に、神楽殿がどう写ったかということだ」

「まだ十代半ばころの娘に見えたが、御坊には夜叉でも見えたか」

「色即是空、空即是色とは真理よ。眼に写る姿に意味はない。あの娘にいかなる因縁があつたのか」

楽坊は、先程まで神楽が立っていたところへ向けて、手を合わせた。何の話をしているのかと毒付こうとしていた重蔵は、目を閉じた楽坊の神妙さに打たれた。鼻を穿りながら経典を土足で踏んで平

然としているようなやさぐれ坊主が、薬師如来のごとき横顔を見せることの不思議さを、重蔵は感じた。僧侶の格とは、外形や日常の挙措には現れぬ質のものらしい。

楽坊の祈りの邪魔になることをおそれた重蔵は、立ち去ろうとした。その背へ、目を閉じたままの楽坊が、

「おぬしとはまた話したい。どこの陣へ身を寄せるにせよ、大木の陰で昼寝をするにせよ、どこに行けば再び会えるのか、教えてはもらえぬか」

と尋ねた。

「昼寝もよいが、とりあえずはどこぞの陣へでも行ってみる。ほれ、そこに丁度新しい出丸が築かれかけておる。そこにも行ってみよう」

重蔵は、騒がしい城内にあつて、一際喧しい音を立てて新たに生まれようとしている出丸を指さした。そこは後年、真田丸と呼び習わされる出丸であった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7400h/>

---

錦城十六士

2010年10月8日13時55分発行